



教職大学院

Newsletter No. 124

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.7.6

拠点校 至民中学校に思う

福井市至民中学校 校長

小林 真由美

この4月に教職大学院の拠点校である至民中学校に校長として赴任しました。個人的には、福井市教育委員会やこの教職大学院でも勤務させていただき、11年ぶりに中学校の現場に戻ってきました。行政や大学も自分にとって大きな学びの場であり、貴重な11年間でしたが、やはり、これまで自分が歩んできた中学校教員という道のりが何だったのか、その歩みをたどり直す意味でも、もう一度、最後にどうしても中学校に行きたい、そう思って至民中学校への異動を希望しました。

ご存じの通り、至民中学校は平成20年に移転開校し、葉っぱの形の建物や70分授業、異学年型クラスター方式（縦割り集団）、教科センター方式などユニークな取組で全国からも注目を浴びてきました。私はその開校直後に教育委員会に行きましたので、開校にあたってのたくさんの方々の思いや期待、そして当時の生徒達の誇らしげな姿を、とても近くで見してきました。一方で急な改革に不安を感じていました。70分の授業は生徒にとっても、先生にとっても長すぎてつらいときもある。クラスターという縦割りだけでは無理があり、学年体制が必要なこともある。こうした課題がその時々で大きな問題となり、10年の長い年月をかけて、至民中学校は少しずつ、その改革を修正してきています。70分授業は6年前に50分授業に戻しました。昨年度から、教室の配置は年間通して、学年ごとになっています。その一方で、温かな地域の方々との連携は、開校当時から今も大事な至民中の宝物となっており、日々、支えていただいています。また、クラスター制に関しては行事と関連させながら存続し、クラスター対抗

合唱コンクールやクラスター給食など、生徒は学級、学年の繋がりに加えて、クラスターとしてのまとまりで、自主の力を磨いています。

赴任してきて三ヶ月が過ぎましたが、改めてこのすてきな校舎を眺めては、この建物に託された多くの方々の夢と願いを毎日、思い出しています。福井市が財をかけてこの学校を創りあげたことの重さもよくわかっています。だからこそ、それを決して無駄にしてはならない、その責任をひしひしと感じるのです。

まず一番に考えたことは、この思いを今いる生徒達と先生方に伝えたい、そして、改めて今、みんなにより素晴らしい学校を創りあげたい、ということ。折しも、令和という新しい時代が始まった最初の授業の日、全校道徳という形で集会を開きました。今年度、新たに「未来につながる学力の育成」という学校教育目標の意味、そして生徒達みんなが令和という時代の担い手であることを伝えました。葉っぱの形の意味やそこに託さ

内容

巻頭言	(1)
スタッフ 自己紹介	(2)
院生 自己紹介	(5)
ミドルリーダー・マネジメントコースだより	(13)
インターンシップ・木曜カンファレンス報告	(20)
5月合同カンファレンス報告	(20)
研究集会・公開研究会などの報告	(25)
教員免許状更新講習に向けて	(28)
スケジュール・編集後記	(30)

れた願いについて考え、最後に改めてこの美しい校舎の映像を鑑賞しました。普段はみんなに直接関わることの少ない事務職の先生が書かれた至民への思いを読み上げ、設計にあたった方のコメントを伝え、この学校にかける多くの人たちの夢と願いを伝えました。どれだけ伝わったかは分かりませんが、今の生徒の姿を見ると、何らかの形で、一人一人みんなに学校への思いが育っているように思われます。その後もことあるごとに、このすばらしい学校の中で学ぶ、その誇りと責任を彼らに伝えているつもりです。

まだ、至民中にはたくさんの課題が残されています。初めは教室として扱うつもりだったホームは、教科教室を学級としての教室にしたために、今、空いている状態になっています。こうした課題の一つ一つをみんなで考えていくことが、これから私のやりたいことです。まだまだたくさんの可能性が残されていて課題があるからこそ、学校は進化していきます。例えば、ホームの活用について、私はぜひ、生徒達に新しいアイデアを出してほしいと思っています。設計者の方は、先日、家庭科の授業の中で、生徒達といっしょに考えたいと言ってくださいました。自分が考えたホームが、設計者と一緒に実現し、自分たちで創りあげた空間に生まれ変わっていく、それをまた使いながら、課題を見つけ、次の後輩がさらなる改

良を加えていく・・・そんなことが実現できればどんなにすてきなことでしょう。

学校は、もう、教員だけで築き上げる場ではありません。温かな地域の方々、熱意ある保護者の皆様、そして様々な角度から新たな光を差し込んでくれる教職大学院、そしてその中心で輝く生徒達。みんなが「至民中をよくしたい」という願いのもと、いろいろな力を出し合って創りあげていくのが、これからの学校のあり方だと思います。ぜひ、大学の皆様からのお力添えも今後もよりいっそうお願いします。そして、大学を通してこれを読まれている方々の参画にも期待します。どうぞ、いつでも学校においでください。関わる方が増えれば増えるほど学校は可能性を広げられると思っています。

毎朝、校門に立って美しい野山と校舎を眺めながら、生徒達の笑顔の「おはようございます」の一言を聞くとき、この上ない幸せを感じます。なんとしてもこのすてきな生徒達に、このすばらしい学校にいる意義を感じてもらい、それを自分たちの力で、日本国中に発信してほしい、そのために今、自分に何ができるか、何をしなければならないのか。朝の挨拶を終えて、至民坂をのぼる一步一步に、いつもそんなことを考えている私です。

スタッフ 自己紹介



花木 秀実 はなき ひでみ

4月から非常勤講師として勤めています。花木秀実と申します。小中学校勤務を定年退職し、再任用教諭として初任研指導教員をして4年目になります。実は、この年になって大学に足を運ぶことになるとは思ってもみませんでした。今までの職場でも緊張感に満ちた、やりがいのある毎日を過ごしてきましたが、

今年は国内外の大学スタッフの方々、院生の皆さん、関係学校の先生方、教育書・実践報告等との出会いがあり、刺激に満ちた時間を過ごさせてい

ただいています。以下、簡単に私の今までの歩みを紹介させていただきます。

初任校は小浜中学校。教科部会や学年会の取り組みが活発で、新採用に熱心に関わってくれる先生方でした。新採用から担任となり、2年目に

「保護者回覧ノート」をはじめました。中3を見据えて、保護者の思い、進路などに対する考え方を知りたいと思って始めたものです。拙い指導ばかりでしたが、このような取り組みを評価して支えてくれる保護者に助けられました。その後、地元の敦賀に異動し、気比中、栗野中と勤務しました。教諭時代は県の研究指定校の指定授業をしたり、研究主任、進路指導主事といった仕事を担ったりしました。

36才から敦賀市教育委員会で指導主事として9年間、幼、小、中の26園・校を指導主事2名、体育指導主事1名で指導する仕事を経験しました。先輩の指導主事は力量があり、授業実践も豊富なため、いっしょに回りながらいぶん勉強させてもらいました。いろいろな学校を見て回れたため、管理職の先生方の考え方、学校経営、研究の取り組みなど、私にとってはとてもよい経験になりました。若手教員の育成、学力向上が市の教育課題であったため、教員研修の充実、標準学力検査の導入・分析・活用や、指導書・視聴覚教材等の整備などに取り組みました。

45才から教頭となり、まず松陵中に赴任しました。教頭の職務の傍ら、早朝から夜まで、「割れ窓理論」さながら校舎の隅々まで破損箇所等があればすぐ補修して回っていました。2年後、中央小学校に異動となり、池田稔泰校長のもと、算数の授業研究に関わりました。日々、子ども主体の授業を追求し、毎年の自主研究発表会には、全国からたくさんの先生方の参観がありました。当時の実践は『授業の「質」を高める新しい算数の学習』『「自ら学ぶ授業」のアイデアと実践』という冊子になり、出版されています。

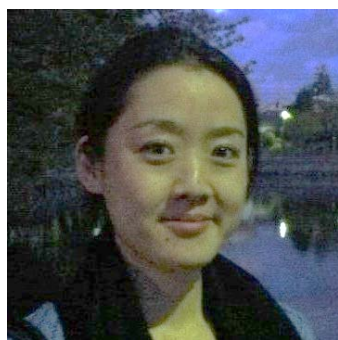
52才からは校長として敦賀北小学校で3年間、気比中学校で5年間勤めました。校長として留意したことの一つは教職員の思いの相互理解と参画意識の醸成ということで、週案コメント（心に抱いているいろいろな思いが書かれている）を集約したものを毎週発行したり、学校・学級経営や授業づくりの各項目を1人1人の教員が担当して提案し、共同実践する「ともにつくる気比中プラン」に取り組んだりしました。今一つ留意した

ことは児童生徒にも、教職員にも、保護者にもわかりやすい学校教育方針のスローガンを提示することで、「児童が主役」「本気で学び、本気で励む 仲間とともに」といった言葉で学校経営を行いました。その間、いじめや暴力行為の防止をめざし、「ストップ!いじめ・暴力アクションプラン」を作成し、実践しました。それらの実践は

「いじめや不登校などの未然防止に向けた集団づくりと生徒指導体制の在り方—全教育活動に生徒指導の機能を生かし、よりよい個と集団に成長させる総合的な取り組みを目指して—」という内容で、嶺南ブロックおよび福井県中学校教育研究集会で発表し、文科省にも紹介されました。

この間、県小教研や県中教研主催の研究大会等で研究提案や実行委員長などの仕事もしました。また、敦賀市教委の「敦賀っ子教育審議会」委員およびその下部組織「学び・育み委員会」委員長となり、各種リーフレット、「敦賀スタンダードカリキュラム」「同改訂版」「家庭学習ガイド」の編集発行に関わりました。スタンダードカリキュラムとは、各種学力検査等で明らかになった敦賀の児童生徒の強みと弱みを年間カリキュラムや小中連携に反映するとともに、敦賀の自然・文化・歴史などの資源を生かしたふるさと教材を盛り込んだ、敦賀独自で敦賀の子ども達のためのカリキュラムという意味です。

教職大学院では、敦賀を中心に嶺南地区の大学院生およびその勤務校の研究実践に関わる「エリア・ファシリテーター」という役割をいただいています。関係の先生方とともに学校改革や授業改善に少しでも役に立てるよう努めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



谷口 光 たにぐち ひかり

皆様、はじめまして。4月1日から二の宮キャンパスに在席しています。何をお伝えすべきか色々思案した結果、これまでの人生の粗筋を自己紹介としたいと思います。

生まれは田園風景を眺められる大阪の山岳地帯。代々教育関係者一色の家庭で育ちました。幼少期にALT配置が開始し元教員の祖母がそのまわりのお世話をしていたのもあり様々な外国のお客

様を実家にお迎えする機会がありました。これに感化されてか小1の七夕の短冊には「英語とかいろんなべんきょうがしたい」と書いていました。

話は一気に飛んで人生で大学受験をどうするかに差し掛かります。幼少時から語学と文化への強い関心に加え丁度3ヶ月ホームステイしに来てくれた同年代のインド人女の子からよい刺激をもらって海外進学を決めました。準備中に勃発した米国同時多発テロ事件(2001.09.11)で一気に世界情勢が激変。明日はどうなるのかな?と思いながら翌年3月米国へ向け出国しました。

月並みな話ですみませんが異国教育機関では当初大変な事だらけで失敗の連続でした。本当に沢山の助けがあって学業を軌道にのせることが出来ました。一番最初にお世話になった学校にいた How do you know what you know? が口癖の先生が講義で紹介してくれた E. サイド氏主著の Orientalism に程よく共感し、地域研究を専門と決めました。途中母校からシンガポールへ送り出してもらい、拠点を変えながら東～南アジア地域まで取り組みました。予想以上にサンスクリット語や古代インド分野に没頭して学生時間がタイムアウト。とりあえずここまでを祝福して卒業式は（日本人なのに）サリーをまとして大学生活を終えました。シルクロードの残り（西アジア～中東分野）と大学院進学は一旦棚上げして社会人生活に入りました。

2008 年の後半、南インド屈指の IT 都市ハイデラバードにあるインド IT 会社本社で勤務をしていました。歴史的にはイスラム文化が色濃く、旧市街地にはイスラム風建築物が名所としてあり、またビリヤニ飯がインド一美味しくて有名等で渡航前からとても楽しみにしていました。しかし、現実にはインドの競争社会から優秀なインド人 IT エンジニア達を世に送り出してきた筋金入り理系インド人講師陣による厳しいインド式 IT 教育の毎日が待ちうけていました。文系の私には言うまでもなく未開拓地どころか結局は不得意分野。できないながらもとりあえずやったあの日々は今となって懐かしくも感じます。この頃に起こったムンバイ同時多発テロ（2008. 11. 26）で絶賛保留中だった西アジア案件と大学院進学の棚卸しを意識し始めました。

2011 年初頭、4 月から始まるアラビア語学校の入学通知を手に新生活を心待ちにしていました。東日本大震災（2011. 03. 11）が起きました。この惨事から開校が一時不透明になりましたが時期をずらし開校。多様なネイティブ教師陣（スーダン、エジプト、サウジアラビア等）による直接法に 2 年間浸りました。私の場合、文字も全く知らないレベルから入り、授業中先生達がアラビア語で何か言っているのを懸命に拾い、休み

時間になれば「一体何だったんだ！」「この意味って？」等の活発な質疑応答のやりとりがクラスメイト間で自然発生し、授業後相互学習をする日々を送りました。このおかげで駐日アラブ大使館とのご縁に繋がり折に触れてアラブ文化や慣習を体験させてもらい、中東独特の地域性にふれる機会を沢山提供いただきました。

その直後に入職した国際環境 NGO では国内外の気候変動・エネルギー問題啓発・政策提言活動に携わり、前述でお世話になった中東石油産出国とは政策的に相反する立場となりました。この年に横浜で IPCC（気候変動に関する政府間パネル）が開催され、会場入りして世界最先端の地球温暖化科学がどう交渉され国連政策の土台となっているのかを直視します。毎日交渉は深夜まで続き、様々な国からなる交渉グループがぶつかりあい、最終日は徹夜で丸くおさめた会合でした。ここまでの一連の体験から大学院進学に向け具体的進学先を北米や欧州以外地域と決め、アジア平和構築奨学金プログラムでコスタリカとフィリピンの 2 教育機関 2 修士課程（環境と持続可能性観点の平和教育と環境問題の国連交渉）へ進学し修了しました。

帰国してからは国内外の国会議員の政策形成能力開発を主軸にした国連人口基金や国際機関による人口開発国際協力プロジェクト業務に携わり、省庁で国連気候変動枠組条約会合をはじめ様々な国際交渉補助業務に従事しました。その間、社会的に困難な状況に置かれた青少年への教育支援やクルド系難民コミュニティー訪問、有機農業、都市養蜂活動や風土に根ざしたくらしの手仕事（主に機織り）等に携わりながら環境・教育・平和構築・国際協力等分野を自分なりに黙々と探求してきて今日に至ります。

教育分野はかねてから社会人経験後に戻ってきたいと願っていました。この度の機会を心より感謝しております。皆様が奏でる多彩で豊かな取り組みや福井という土地の織り成す魅力の数々をこれから一つ一つ事務方として追っていただけるのを楽しみにしています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

院生 自己紹介



上田 晴之 うえだ はるゆき

この4月より、福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学した上田晴之です。よろしくお願いいたします。私は昨年度より福井大学教育学部附属幼稚園に勤務しております。

そして、前々より行きたかった教職大学院。今回入学することができ、学ぶ機会を得ることができて本当に嬉しく思っています。

私は私立幼稚園に1年半、小学校勤務を半年経て、福井市の公立幼稚園で14年間勤務をしてきました。福井市公立幼稚園は小中学校に併設しているところが多く、職員室も小学校や中学校の先生方と同じところが多いので、異校種の先生方や文化から、様々な刺激を受けながら教員生活を送ってきました。

そして今回、附属幼稚園に異動してきて、目の前の子ども達と一緒に日々園生活を送りながら、「幼児教育についてもう一度勉強し直したい」「さらに視野を広げながら幼児教育について深化させていきたい」「福井市、福井県の幼児教育のために自分は何ができるか」など、先の展望や課題をもちながら教職大学院への入学を希望させていただきました。昨年度は夏、冬の集中講義やラウンドテーブルに参加し、周りの先生方が自分の考えたことや実践したこと、自分の理論を言葉にして語っていく、そして

語りながらも自分の考え自体を揺さぶっている姿を近くで感じて、自分もこのように学びたいと思いました。

特に今年度は研究主任として、附属幼稚園が幼児教育研修センターとしての機能を目指して、福井県内、県外の幼児教育をリードしていけるような研究のあり方を職員一同模索し、実践をし始めました。職員自らが高め合い、柔軟なアイデアを持ちながら、目の前の子ども達のために何ができるか、意識をもって取り組んでいきたいと思っています。

ここ7～8年の間で、全国的に幼稚園と保育園の機能を併せもった認定こども園が増えています。福井市少しずつ増えてきています。子ども達が長時間園で過ごす中、保育内容として、環境を通した遊びが本当に確保されているのか、十分な空間、時間の中で子ども達は五感をフルに使い、思い存分自分を出して遊ぶことができているのか、など考えなければならぬことがあると思います。これまでの自分が培ってきた経験、そして附属幼稚園において現在積み重ねている経験とこれから教職大学院で学ぶことをリンクさせながら、ゆくゆくは福井の幼児教育に自分なりに寄与し還元していきたいとも思っています。

これから出会う皆さんとともに学び、実践を語り合いながら高め合っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



青木 喜一郎 あおき きいちろう

この度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました青木喜一郎と申します。現在、福井市森田中学校に勤務しております。

この自己紹介を機に、今までの教員生活を自分なりに振り返ってみたいと思います。

平成8年に新採用教員として敦賀市立敦賀西小学校に着任し、6年間勤めました。ここでは、特別活動主任として、地域力を活用して校外ウォークラリーを企画・実施しました。また、児童会役員や各委員会委員長のリーダー性を高めるために、小学生ではありましたが、1泊2日のリーダー研修会を実施しました。この頃は、学校が活性化していくことに、児童会役員も私も共に喜びを感じ、それを共有していたように思います。

平成14年に永平寺町御陵小学校に着任。ここでは、体育主任として活躍する場を与えられ、多くの体育的行事の企画・運営を自由にやらせていただきました。また、この間、福井県教組青年部書記次長として、沖縄視察、東京での全国青年部集会参加、福井県教研集会平和・環境部会の運営等を担当しました。若い同世代の仲間と語り合ったことは大変貴重な経験となりました。

平成17年に永平寺町松岡中学校に着任。ここでは、文部科学省指定学力向上拠点校として発表があたり、国語科主任・公開授業者として研究に取り組みました。また、この頃は、女子バスケットボール部顧問として、何としてでも北信越大会に出場したいという思いがありました。

今、振り返ればあの頃の指導方法については反省することばかりですが、自分なりに精一杯努力したことは大きな糧となっています。

平成22年に織田小学校に着任。第35回福井県国語教育研究大会鯖丹大会において、小学校高学年部会の公開授業者〈書く領域〉として研究に取り組みました。様々な様式で書いたことをポートフォリオ化して積み重ねていき、自分だけのツールボックスとして今後の授業等で活用できるように工夫したり、新聞記事を利用し考えを述べ合う活動を取り入れたりする等、中・長期的な視点で児童の国語力を向上させました。

平成25年に福井県教育庁生涯学習・文化財課に着任。初めて行政の仕事を経験させていただきました。ここでは、仕事の厳しさや一般社会においての捉え方・考え方など、教員の立場から離れた視点で物事を見て判断することを学びました。

平成28年に現在の勤務校である福井市森田中学校に着任。ここでは、研究主任や学年主任をさせていただいています。

今まで、様々な教育現場で多くの経験を積みさせていただきました。しかし、現在、自分はこの経験だけではこれからの急激な社会の変化には対応しきれないということを感じています。今までの経験をもとに、自分の拠り所とする「内なる理論」を確立し、これから迎える時代においてもこの理論が通用するものなのかを検証していく必要があると考えています。そのためにも、大学院と学校現場において「実践・振り返り・省察」のサイクルを大切にしながら研究を深めていきたいと考えています。



伊藤 康弘 いう やすひろ

自己紹介に代えての
独り言

1. 承前

さくら認定こども園
(以降「さくら」)の
伊藤康弘と申します。

園長をしています。

6年前に玉川大学の大豆生田啓友教授の幼児教育の講演を県立大学のホールで教頭と聞いた時

に、衝撃でした。頭が真っ白になりました。こんな園にしたいね、こんな保育をしたいねと思わず言葉にしました。子ども中心の保育にどうしたらできるんだろう、プロジェクト保育は、どうしたらできるんだろう、スライドの子どもたちは生き生きしていたよと感想を交換し、さくらでは無理かもと、話し合ったことを思い出します。

それから2年後に教頭が学校改革マネジメントコースに入学しました。さくらの保育を子ども中

心に切り替える試みが教頭先生主導で始まります。子どもと保育教諭との関わりをこども中心にしよう、カリキュラムの核は「午前の園外保育」と「プロジェクト保育」としよう。生活と遊びを分離し、プロジェクト保育のために園舎を増築しました。子ども達が遊び込める空間を作るために、園庭のデザインや設置する遊具を建築士の先生と夢を語り合いながら片方で算盤を弾いていました。予算が足りないので2×4材を購入して電動大工道具で、ベンチ、棚、椅子、机やウッドデッキを作りました。そのように教頭と保育の質の向上を目的とする活動を3年間進めてきました。

まだモデル園と比較すると成果と言えるほど変わったわけではないようにも思います。しかし変革に取り組んでいるプロセスは皆さんから認めていただけていると思います。

2. 教職大学院に入学しよう

教頭とは、保育の質の向上を目指した流れを止めたくないねと話をしていた、教頭の修了に引き続いて、私が4月から学校改革マネジメントコースでお世話になることになりました。昨年の10月に当園の公開保育研究会で、松木先生から勧められたこと、小林和雄先生に振り返りについて教えて頂いたことが、迷いを断ち切りました。

3. 入学して2ヶ月何が変わったか

日々の重要でないけど緊急の作業に時間を取られていた以前からすると、確実に月に3日間は、カンファレンスと実践報告を書く時間が確保できます。重要だけど緊急でない学びの時間を取れるようになりました。



大石橋 義治

今年度より、連合教職大学院学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました。数十年ぶりに学生に

なるということでドキドキ・ワクワクしています。どうぞよろしくお願いします。

現在は、福井県特別支援教育センターで勤務しています。主な業務として、園や小、中、高等学校に在籍する、特別な教育的ニーズのある子どもたちを支える、先生方や保護者の方、学校を支援するための教育相談や、特別支援教育に関する研修の企画、運営などを行っています。特別支援教

4月の月間カンファレンスで、OECDのEducation2030のLearning Framework2030を読み解けたことで気分を良くしていました。6月に熊本市での全国保育園連盟の保育研究大会で田熊美保先生（OECDシニアアナリスト）のお話を聞いていたら、OECD Learning Compass2030と変わり、図も羅針盤で驚きました。OECDのWebサイトで、羅針盤は、Students自身で目的地への誘導を学ぶことを強調する隠喩だとあります。以前のLearning Framework2030は、Studentsは受け身的に書かれた図だと感じていたので解消したのでしよう。

また時間が空いたら読みたい書籍が読めるのではと期待して5月に何冊かの書籍を購入して目の前に並べました。

井庭崇編「クリエイティブ・ラーニング」、三森ゆりか「絵本で育てる情報分析力」、磯部錦司・福田泰雅「保育のなかのアート」。まだ1冊も読めていないのに、6月に何冊かが加わりました。積読（つんどく）も読んでいるかな。

4. 最後に

4月と5月のカンファレンス、さらに6月7日の公開保育で中島先生と岸野先生、小嵐先生を迎えて沢山のご助言を頂戴しました。ありがとうございました。ご助言からの気づきを整理しつつ現場と対話していこうと思っています。

教職大学院の先生方、院生の皆様、どうぞお付き合いのほど、よろしくおねがいします。

おいしいばし よしじ

育センターに勤務して3年目となり、教育相談等を通して、福井県における特別支援教育の課題も見えてきました。大学院では、2年間の実践を通して、大学院の先生方や院生の皆さんから御意見をいただきながら、少しでもその課題の解決に向けて取り組んでいければと思っています。

特別支援教育センターに勤務する前は、小学校、特別支援学校の教員として働いていました。ここ2年間は、現場を離れ、外部機関という立場から学校現場を見ることができ、新しい発見や気づきがありました。しかし、子どもたちとの距離が離れてしまったことに、時々寂しい気持ちにもなります。目の前の子どもたちのことを思い浮かべながら授業を考えたり、一緒に給食を食べた

り、遊んだり、これまで当たり前だったことができないことに、まだ慣れていないのが本音です。今後、特別支援教育センターや教職大学院での経験を現場で生かせるよう、与えられた貴重な時間を大切に過ごしていきたいと思います。

私がこれまでの教員生活の中で印象に残っているのが、今から10年前に3年間勤務した香港日本人学校での経験です。「海外で働きたい」という小さい頃からの夢を叶えるために希望し、妻と当時3歳だった娘と3人で香港に行きました。香港での生活は、文化や生活習慣等の違いから、毎日がとても刺激的で充実したものでした。最初の頃は、「日本に帰りたい」と連呼していた妻も、3年後には「あと数年暮らしたい」と帰国することを嫌がっていました。私は、香港でも家と学校の往復で、日本の生活とあまり変わりませんでした・・・。



兼松 かおり

この4月より連合教職大学院・教職開発専攻・学校改革マネジメントコースに入学しました福井県若狭高校の兼松かおりです。二人の子持ちで兼業主婦の私が、なぜわざわざ連合教職

大学院で学ばせていただくことになったのかというと…大学時代にあまり勉強してこなかったというのがありますが（笑）、大きく言うと二つあります。

一つ目に、この変化する世の中（教育・生徒含む）を生きていく中で私自身も変化して行きたいと考えたからです。新学習指導要領も変わり、大学入試センター試験も変わります。生徒に求められることも大きく変化すると同時に、教師に求められることも大きく変わるのではないかと思います。授業をする中で、生徒の微妙な変化を日々感じていた自分としては、自分のやってきたことに固執することなく、いつも柔軟に変化する人間でいたいと思ったのが一つ目の理由です。

二つ目に今まで教員をさせていただく中で、校務分掌の仕事でも、部活動の担当でも、授業でも問題を一人で解決するのではなく（というか一人では解決できないです）、周りの先生方、専門機

関の方、地域の方などなどつながっていくことの重要さを感じたからです。これは現在担当するSSH・研究部の仕事はもちろんですが、前任校で担当していた相談室や生徒指導部の業務でもそうでした。「自分たちの仕事は、生徒や先生方を適材適所でふさわしいところとつなぐこと」と現在所属するSSH・研究部の部長の先生と前任校の相談室長の先生が同じことをおっしゃったのが非常に印象に残っています。この大学院では毎回新しい先生方とお話ししてつながっていく中で、自分や自分の実践を見つめ直したり、新しい視野を得ることができたりします。日々忙しい中業務をこなしていると、自分の仕事だけで一杯一杯になり、人とつながっていくことが億劫になり、結果あまり成果があがらないということがありませんか？これからの時代、学びや助け合いのネットワークが非常に重要だと思ったのです。学校改革マネジメントコースに在籍して、学校全体でどう取り組むかという視野を持った上で、特に学びの中心となる探究的な学習のあり方や、自分の専門教科にそれをどう生かしていくかについて研究していきたいと考えています。

かねまつ かおり

これからどんな学びやネットワークを作ることが出来るのか楽しみです。2年間よろしくお願いします。



城 恵美子 じょう えみこ

カリタス小学校の城 恵美子です。カリタス学園は神奈川県川崎市で唯一の私学のカトリック校です。

辛く悲しい事件がありましたが、多くの方々に助けていただき、学校を再開することができました。これからも教職員一同、子どもたち、保護者、そして関わって下さる全ての方々のために力を尽くしていきたいと思います。

現在、私はカリタスに勤めて二十数年。長く音楽専科で教えていました。少し担任をして、現在の役職は、主事、1年学年担任、学園宗教センター（幼、小、中高保護者を連携する基点、教職員の研修を企画するところ）のスタッフ、そしてアフタースクールを2020年開校にむけて準備しています。仕事に関して、パソコンなど機械類全般が苦手ですが、職員室であたふたしていると、必ず若者が助けてくれます。素晴らしい職場に感謝。

写真は、昨年度受け持っていた2年3組が、総合で育てていたヤギのとわちゃんが生んだ子ヤギの『小春』です。小春日和のうらかな2月の朝生まれました。子ヤギはすくすく育ち、3月にお別れする時まで、アクティブに、軽やかに跳び回っている姿をみんなに見せてくれました。今年の1年生は今、2年生の飼っているヒツジと一緒に世話してもらいながら、小屋掃除の仕方や、お散歩の仕方を教わっています。大好きな動物たちと触れあっているほのぼのとした光景にこちら

も癒やされます。子どもたちの願いに支えられた「総合」の活動は、試行錯誤を繰り返しながら、より深く、広く展開していきます。子どもたちにとってまさしく生きた現実であり、その活動を通して学ぶ力こそ「本物の学力」であると考えています。

さて、7月生まれの私は、夏が好きで冬がとても苦手です。まあ夏もこのところの異常な暑さはさすがにダメですが…。この季節、楽しみにしているのは、世界最大の自転車レースであるツール・ド・フランス。その魅力を少しだけ紹介します。21日間、4時間から7時間のレースが全て中継されます。こちらは夜なので、ほとんど寝落ちしながらも、がんばって見えています。それは、レースだけでなく景色も楽しむことができるからです。古い町並みや古城、緑豊かな大自然、そびえ立つ険しい山々の上空から撮影される映像は、それを見るだけでも充分楽しめ、旅行しているような気分させてくれます。また、このレースはチームで闘います。チームの中にはエースがいて、そのエースを優勝させるために、風よけになったり、水や食料を運んだり（時間が長いので、食べたり飲んだりしなければハンガーノックになってしまう）、エースのタイヤがパンクしたら自分のタイヤを差し出すなど、様々なサポートをチームで行います。それぞれのチームの戦略が他の競技にはない面白さです。ぜひチラッと観てみてください。

これからもみなさまとの出会いを大切に、冬になってもくじけないで学んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。



北川 喜樹 きたがわ よしき

こんにちは、北川喜樹と申します。今年度より学校改革マネジメントコースでお世話になります。勝山市立村岡小学校に勤務する51歳の教頭です。子どもの

頃からサッカーをしており、教員になってからも2

0年あまり中学校でサッカー部を担当してきました。趣味と実益の一致。

勝山市になじみのある方は少ないでしょうが、県立恐竜博物館がある町ですよと言うと「あー！」と返して下さる方も多いかな。今年の10連休GWは例年以上のすさまじい「恐竜渋滞」で、思わず自転車に乗ってその長さを確かめに行ってしまいました（測定結果約5km）。数年前までは観光客の皆様

がご存じないステキな地元道があったのですが、今ではもうバレてしまいそこも渋滞。現在、おとなしく渋滞に巻き込まれるしか恐竜博物館に近づく方法はありません。ちなみに村岡小学校は、その恐竜博物館の近所にあります。

さて皆さん、「なんで学校の先生になろうと思ったの？」と誰かにたずねられたこと、ありませんか？これまで自分、多分何回もこの種の質問をされてきました。

その時に何と答えるかは別として、自分にはその質問に対して必ず頭に浮かんでくる人物が2人います。自分が中学生時代に理科を習った先生と、数学を習った先生です。

理由は忘れてしまったのですが、自分はその理科の先生のことが大好きでした。思い出しただけでもときめく、若くてきれいな女性の先生では残念ながら、無精ひげと丸いメガネがキラリと光る卓球を愛する小柄なおじさまでした。わざわざ質問を作って、休み時間に職員室まで聞きに行った記憶があります。当時の自分はきっと、その先生にいい生徒だと思われたかったのでしょう。かわいらしい。

数学を習った先生は、無精ひげとメガネ(また!)の、新卒フレッシュ先生。入学から卒業までずっと担任してくださった先生で、よく叱られて泣かされました。しかしその先生が3年間出し続けた学級だよりの内容や話してくださったことは、今でもよく覚えています。「君ら、人間の単純記憶はそう長持ちしない。今から先生が言う10桁の数字を3週間

後に覚えていたらほめてあげる」…この手の話とか。先生、残念ながら自分の勝ち。3674922204。3週間どころか現在38年目。

なぜ自分は先生としての人生を選んだのだろう。書こうと思えば書けますが、嘘くさくなるのでやめておきます。ただそこには、先ほどの2人の先生方に代表されるような、「他者との関わり」というものが確かに存在しています。そういう方々との出会いやつながりがなければ、自分は今、先生としては生きていないと思います。

「今年、教職大学院で研修を積ませてもらうことになった」そう教員仲間に伝えと、「今教頭でしょ、その前は市教委指導主事でしょ、何でわざわざ教職大学院を希望する???」と言われます。考えるに私は、まだ出会っていない皆様方との新たなつながりを求めてここへ来たのだと思います。ですからどうぞ仲よくしてやってください。よろしくお願いします。

約30年前、自分は福井大学教育学部を卒業後、22歳で地元の勝山南部中学校に理科教諭として赴任しました。それから20数年間、勝山市内の中学校でずっと担任をさせてもらい、多くの生徒さんとお会いしました。その中には、教職を選んで立派に先生として活躍している子がたくさんいます(実は今の職場にも…)。彼らはなぜ「先生」として生きる道を選んだのでしょうか…。勇気を出せたら、たずねてみたいと思います。



齋藤 雅実

平成31年度より、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました齋藤雅実と申します。勤務先は、坂井市立長畝(のうね)小学校です。3年生の学級担任と研究主任を担当しています。どうぞ宜しくお願いいたします。

さいとう まさみ

長畝小学校は、坂井市の西部に位置しています。竹田地区と長畝地区の二つの地区から成る広い校区です。校区には里山や溪流、ホテルが観察できる豊かな自然環境や、県無形民俗文化財に指定されている日向神楽等の伝統芸能があります。子ども達は、地域の方やボランティアの方に温かく見守られながら日々の学校生活を送っています。

さて、私と福井大学教職大学院との出会いは、中学校区での会議でした。平成29年度、丸岡中学校

区で指定されていた「魅力ある学校づくり」の取組みで、丸岡中学校、平章小学校、高椋小学校、長畝小学校の各4校の代表者が集まり、小学校間の連携や小学校と中学校の連携をどのように展開していくとよいかの作戦会議を開きました。この会議には、教職大学院の卒業生と在学生の方が参加されていました。私は、話し合いの中でこの2名の先生方の見識の広さと深さと情熱にとっても感銘を受けました。そして、「話し合い」を通して、これまでに考えていなかったことが新たに創造されることの「楽しさ」と「すばらしさ」を実感しました。こうした創り出す喜びが、次の活動への原動力になるのだと思いました。

また、翌年度、職場の先輩の先生が教職大学院に入学されました。私にとって、教職大学院がより身近なものとなりました。大学院での様子を伺うと、月間合同カンファレンスや年間2回のラウンドテーブルとシンポジウム、長期休業中の集中講座、長期実践報告作成などがあることを教えていただきました。私は、聞き慣れない言葉に戸惑いながらも、こうした現代的な学びの中で成長し、教師として深化していくことが出来たならどんなにか素敵だろうと

思いました。先輩の先生は、これまでの経験を生かし、職場のコミュニティ作りと学びの創出に取り組み、若手とベテランの融合を図り、職場の活性化を实践されていました。

不安と希望にあふれた4月6日の開講式、私の教職大学院生活がスタートしました。4月と5月の月間合同カンファレンス、6月のラウンドテーブルとシンポジウムを経験し、他の院生の方の課題や悩み、展望を共有したり、県内外の方の実践や長期実践報告書から新たな視点で今後の実践を考えたりと大変充実した3か月を送ることができました。また、教職大学院の先生方をファシリテーターに迎え、様々な校種や地域の先生方と多角的・多面的に話し合うことは、大変勉強になっています。

これらの学びは今後も続いていきますが、私達院生の学びを支えて下さっている教職大学院の先生方に感謝の気持ちを忘れず、教職大学院で出会う「仲間との学び」をこれからも大切にしていきたいと思っています。そして、学んだことを職場の仲間と共有したり、共に学び、新たに創り出したりしていく中で、これからの「学校」を考え、創りあげていくことができるよう頑張っ参りたいと思います。



Ana Lucía Arrecis アナ・ルシア・アレシス

In Guatemala I was working as an elementary English and Spanish teacher. I have been teaching for

five years in different private schools in Guatemala and graduated as a Secondary Teacher Specialized in Learning Difficulties at University del Valle de Guatemala (UVG) and also studied Education and Learning at the Catholic University Rafael Landivar (URL) and Educational Innovation at the Galileo University. Currently I am a student from the Department of Professional Development of

Teachers (DPDT) of the University of Fukui, Japan.

My choice to become a teacher was not made lightly. Many of the great teachers that I have had throughout my education have become my role models. I chose to be a teacher because I realized that teaching is not just a profession, it is actually a very important mission. Teachers have the greatest responsibility of all and are able to shape children's lives. The chance to inspire another human being is not an opportunity it's a challenge. There are too many educators that haven't accepted this challenge, and it needs

to change. Students go to school because they are forced to go. Many times learning is not their top priority, but the teacher's job is to teach. Students are always learning. Since this is the case, a teacher must not only know the content, teachers must also be prepared to teach different things like character, moral, and things that may prove to be more valuable than knowledge itself.

The difficulties I encounter as a teacher in my work environment is the lack of support from parents. Every year I notice more and more students without guidance and in some cases, since they are not able to find guidance at home they look for it on their friends or from what they see on internet or movies, which is not always the most positive influence.

It is most rewarding for me when I am able to make a difference in a child's life, when I am able to ignite curiosity and growth in my students, even those that the rest of teachers believe that there is nothing you can do with. What I like about teaching is seeing my students enjoy being at school and learning at the same time. But as much as teaching can be rewarding, it can also be frustrating and stressful when dealing with unmotivated students, large classes, and heavy workloads.

As teachers we are responsible for planning and then evaluating our students' performance. We are responsible for promoting growth providing additional assistance and meeting with parents and school staff to discuss student development and ways to improve current teaching methods to better suit students. I personally believe that as a teacher is my task to add life to my student's school day by generating interest in all the subjects that I teach, even those that can

be tedious for most students. I always try to have a good sense of humor and the ability to think like my students, and try to deal with the wide variety of personality types and ability levels, while still treating all my students equally.

Education is a fundamental pillar of growth for human beings all around the world. Every country has its own methods in teaching and raising in order to become part of the unique culture that is their own. From my experience so far, here in Japan, education it is less time to state what students should or should not do, but rather more of a period to facilitate discussion on how students would react to a given situation. There are never wrong or right answers, just time to talk about the black, white, and grey areas-just like real life.

My plan for the future is to learn more about the Japanese education and how they are able to develop human values like how to be generous, compassionate, and empathic. Besides this, children are taught qualities like self-control and justice. As well, I would like to learn from their educational system and teaching methods.

ミドルリーダー・マネジメントコースだより

4 月合同カンファレンスでの学び

ミドルリーダー養成コース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程 坂部 宏明

昨年度の 4 月にこの教職大学院に入学し、たくさんの先生方の実践を聴いたり、自身の実践を語ったりすることや様々な理論書を読み解くことで、新たな視点や学びを得ることができた。実践と省察を繰り返し、理論と実践の往還により自分が進めてきた実践に説得力を持たせることができるものであると感じることができた 1 年間であったように思う。これまでの教師人生で経験的に得たものや感覚的に取り組んできたものは、理論に裏打ちされることによってより効果的で効率的に活用できるものとなっていくのではないかと思うことができた。本年度も自分の学びを深めながら、説得力のある実践を進めていければと思っている。

4 月の合同カンファレンスは、Cycle 1 では本年度新たなメンバーで各自が置かれている立場や状況、そして本年度に学びを深めたいことを語り合うことから始まった。同じグループとなった先生方の語りからは、先生方自身の現状をよりよくしていきたいという思いが強く伝わってきた。校種や立場は違っても、子ども達の成長や変容のために手立てを施したり工夫したりしている姿は共通していることに気づくことができた。我々教師のねがいの中心は子どもの姿が変容することであり、子どもの成長を実感することこそが実践の推進力となるのであろう。教師がわくわくして取り組む姿は、子どもに伝わり、周囲の教師を巻き込んで協力を得ることにつながっていくのではないかと考えることができた。

次に、Cycle 2 「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」ということで、資料「OECD Education2030 プロジェクトについて」を手に取り吟味した。この資料を手にとった理由は、勤務校の福井大学教育学部附属義務教育学校はこの「OECD Education2030」の取り組みに 2017 年度から参画し、自分自身も度々関わる機会があったため、今一度その理念を再確認してみたいと思ったからである。この取り組みの趣旨は、「VUCA」（不安定、不確実、複雑、曖昧）が急速に進展する世界に直面する中で、子ども達の中に生きて働く資質・能力（エージェンシ

ー・コンピテンシー）を洗い出し、教育や実践の中で子ども達に培っていかうとするものである。その資質・能力として大きく 3 つが挙げられている。それらは、①新たな価値を創造する力②対立やジレンマを克服する力③責任ある行動をとる力である。子ども達が個人や社会のウェルビーイング（よりよくある）のために主体的に行動するために必要な力であるということを理解することができた。そして、それら資質・能力を培うためにカリキュラムをデザインして実践を進めていきたいと考えた。特に、本校で取り組んでいる「学年プロジェクト」（総合的な学習の時間）の実践に大いに参考になるものであると捉えられた。

また、Cycle 3 「長期実践研究報告を読む」では、勤務校、国語科、研究企画（研究部）、学年主任と今の私と非常に似ている立場からの実践をまとめられた高橋和代先生の長期実践研究報告を読み進めていった。その中で、特に感銘を受けたのは、附属中が現在に至るまで大切に積み上げてきた研究サイクルや実践レポートの意義や目的について言及されており、今現在自分が取り組んでいる研究に大きな価値を見出すことができた。さらに、学年主任の立場から取り組んだ「学年プロジェクト」の実践における悩みや葛藤を乗り越える局面を見て取ることができ、自分自身が現在手がけている学年主任としての立場からの「学年プロジェクト」の実践に非常に参考になるものであった。それらのことから、先輩の長期実践研究報告を読み解くことの価値は、まさに自分の実践と直結して活用できるものであると実感した。これまでいくつかの実践報告などを読み進めることを通して、実践における展開を吟味して自分の実践と照らし合わせて学びとしてきたが、今回ほどの感覚は得ることがなかったように思う。このような直属の先輩方の実践報告が数多ある環境にいささかいただいていることに感謝しながらも、自分の実践を後輩に残していかなければならないという大きな責任も感じた。

そして、Cycle 4「教育改革の方向性、専門職としての実践と学びの跡づけを踏まえ今後の実践と学びの方向性と課題を探る」ということで、自身の長期実践研究報告に向けての本年度の展望を語る機会をいただいた。昨年度からまとめ進めていた①国語科教師として②研究企画(研究部)としてのコーディネータ役の取り組みに加え、学年主任としてのコーディネータ役の実践についてつながりを見出しながら実践報告をまとめていきたいという展望をもつことができた。

今回の4月合同カンファレンスでは、「学年プロジェクト」や「OECD Education2030」など本校が取り

組んでいる実践のルーツとなるものや自分の置かれている立場としての役割について考えることができた。それらのことができたと感じるのは、理論書などの資料や長期実践研究報告をはじめとする実践レポートをじっくり読み解いていくことを通して得るからである。そのように実践と理論の往還によってより効果的な取り組みや手立てにつなげることにより自分の目の前にある子どもの学びにつながっていくことを信じて、この教職大学院の学びをさらに進めていきたいと強く思った。

2年目になって思うこと

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス幼稚園 祢津 由紀子

福井大学教職大学院にお世話になって2年目を迎えることとなった。先月の4月カンファレンスでは、入学当初の時の心持ちとはだいぶ変化したことに気づいた。1年前の私は「コミュニティ・オブ・プラクティス」での、周辺メンバーだったと思う。「私に何ができるのだろうか」と悩んでいた。入学前に本学園理事長から「今までとは違った視点で幼稚園や学園を見てきてください」という言葉をいただいていた。まさにこの1年は、色々な視点から職場、そして一貫校であるカリタス学園全体を見つめることができた実感している。もうひとつ、1年前の4月カンファレンスでは松本先生から「20年先のカリタスのことを考えて、それぞれの校種で何をしていくか」という、いきなりスケールの大きな投げかけをいただき、圧倒されてしまったことも記憶に新しい。力を入れていこうとしていた幼小連携についても、20年も先のことを見越しての一手なのだと考えた時に、途方もないことだと感じてしまった。

私の勤めるカリタス幼稚園は、カリタス小学校・カリタス女子中学高等学校とともに川崎市にあるミッションスクールである。数年前から少しずつ校種間での交流がされるようになってきた。子ども同士の交流はもちろん、教員間では互いの研究会に足を運び、大学院在学・卒業の先生達で構成された会議が定期的に行っている。そのなかでも特に、この大学院の場が貴重な機会だった。同じ敷地にありながら、なかなか顔を合わせるタイミングの無い小学校・中高の大学院メンバーの先生達とじっくり話ができたことが何よりの収穫だと思っている。同じ学園とは言え、

向き合っている対象や働き方も大きく違うため、まさに異文化交流である。しかし、先生達とそれぞれの校種のことを語り合いながら、カリタスファミリーというひとつの共同体の一部であるのだなあという不思議な安心感に包まれていることがある。少し話すだけでは分からなかった、それぞれの現場での声が聞こえるようになってきて、それぞれの校種で大切にしたいものがあり、悩みもあり、親近感をもてるようになってきた。

カリタス幼稚園としての研究は5年目となった。昨年度は研究部を立ち上げ、個人実践や研修報告等をまとめた紀要を作成することができた。新しいことを始めるために、負担が少なく現状に合ったシステムとなるよう仕事内容を調整・取捨選択していくようにしている。今年度は研究部長として、更にそれぞれのクラスでの実践が見合えるような環境作り、また実践を語り合いながら振り返り進んでいく個人実践となるよう、園内研修の充実を図っていきたい。

本園は縦割り保育のため、入園したての年少児10名とクラス替えした年長・中児21名の集まった女兒クラスの担任となって1カ月が経とうとしている。実施しているモンテッソーリ教育で個・自律を大切する時間も確保しつつ、園舎裏にたわわに実った夏みかんをみんなで絞ってゼリー作りをしたり、ビリビリに破いた新聞紙のプールで「キャーキャー」叫びながら遊んだり、子ども達と一緒に楽しむ喜びを噛みしめている。来週には小学校の運動会練習をみんなで見に行きたいなと考えたりしている。これからも、カリタス学園という環境をフルに活かした

がら子ども達と園生活を楽しみ、実践を積み重ねて
いきたい。

プログラミング的思考から捉えるリーダー像

ミドルリーダー養成コース2年／福井市中藤小学校 河上 大機

「Typing（タイピング）・Coding（コーディング）・Programming（プログラミング）…」。

近い将来、こんな言葉が教育の基本理念の一部に加えられる時代がやってくるかもしれません。

これは、「読み・書き・そろばん」という言葉を、「コンピュータ分野の世界ではこんな風に言うのかな。」と、自分なりに置き換えて唱えてみた言葉です。

そもそも「読み・書き・そろばん」は、昔から初等教育で学問の基礎として身につけるべき能力として言われてきた言葉で、その起源は、江戸時代後半の寺子屋にまで遡るそうです。紙に書いてある文章を「読む」こと、文章を紙に「書く」こと、そして紙に書く筆算などの「計算」の基礎を身につけることは、これからの学問においても必要不可欠で普遍的要素であることは間違いないでしょう。しかし、これからの時代、それだけではこの複雑な社会、特に「Society5.0」とまで言われる新しい時代を、快適に生活していくことは非常に困難です。

来年度から必修化される「プログラミング教育」。今、世界では、ICT環境のダイナミックな変容やグローバル化に対応するため、「プログラミング的思考力」の必要性が謳われています。文科省は、【各教科等の学習を通じて「プログラミング的思考」等を育むとともに、それぞれの教科等の学習をより深いものとすることが重要】だと明記していますが、これは何となく漠然で、私たち現場の教職員は、具体的に「何をすればいいのかわからない」状況にあると言えます。

「プログラミング的思考」とは、物事をいくつかの要素に分ける「分解」、分けた要素の順番を効率よく並べる「組み換え」、そしてそれらを「改善」していく能力のことです。教職大学院で1年間学んで気がついたことは、「プログラミング的思考」は、実は子どもだけでなく、現代社会に生きる全ての人々にも必要不可欠な能力なのではないかということです。同時に、作業過程を1つずつ振り返り、プログラムを見直し、原因を突き止め、解決策を導き出すという問

題解決のプロセスは、まさに、教職大学院での学びと全く同じなのではないかということにも気づきました。

しかし、間違っただけとはいえないことは、「プログラミング教育」は、PCでコーディング（プログラム言語を学ぶ）をすることが目的ではないということです。また、「プログラマー」という技術者を育てるキャリア教育活動でもありません。あくまでも、「プログラミング体験」から「プログラミング的思考」に気づかせるということが重要なのです。

また、コンピュータには必ずと言っていいほど「バグ（システム不良）」や「プログラムミス」が付きものです。6月のシーサイドライン無人運転列車逆走事故は記憶に新しいでしょう。運航指令システムと制御システム間の通信不良が原因だと言われていますが、人間がコンピュータシステムに全て任せきりということだけは、今後も避けていきたいものです。過去には、プログラムミスにおける重大事故も多く発生しています。

これからの子どもたちには、「読み・書き・そろばん」の基礎を蔑ろにはせず、しっかりと身に着けた上で、コンピュータシステムに目をつけ、その特性や利点を生かしながら、生活を安全に豊かにしていくことが求められていると思います。（とても高いハードルのようですが…。）

教職大学院での学びも、残すところあと約9ヶ月となりました。その残り9ヶ月間で、自分の授業実践はもちろんのこと、学年主任としての業務や中藤小学校の研究など、様々な実践を「プログラミング的思考」から捉え直していこうと考えています。そして、これからのリーダー像を探り、若い人たちに伝えていければ本望です。

ミドルリーダー養成コース2年/高浜町立青郷小学校 松本 亜耶子

福井大学教職大学院での2年目がスタートしました。4月には開講式が行われました。1年前の自分を思い起こしてみると、資料や1年間の予定の中にカンファレンスやラウンドテーブル等カタカナの言葉ばかりが目に入ってきて、それらがどのようなものか全くイメージができないままその場に座っていたことを思い出しました。「教職大学院でどのようなことを学ぶのか」「どのようなことをテーマにして実践をすすめていけばよいのか」と不安と緊張でいっぱいだったことを覚えています。1年たってみて、ようやく教職大学院の流れを把握し、2年目を迎えて3ヶ月がすぎようとしています。

教職大学院では、カンファレンスと呼ばれる小グループでの意見交換がほぼ毎月行われています。自分のことを語り、グループのメンバーからアドバイスや意見をさせていただくことにも、少しずつ慣れてきました。教職大学院に来て一番良かったと思うことは、校種や地域を問わず様々な方々に出会い、多様な考えに触れることができています。以前同じ職場で一緒に働いていた先輩の先生方等、縁あってまたここで再び会うことができた方もおられます。今年度も、いろいろな場面での出会いを大切にしていきたいと思っています。

昨年度は、3年生の担任として総合的な学習の時間の実践、学級の仲間づくりの実践、本校の研究との関わりで、子どもの学びの見取りについての実践を行ってきました。うまくいかなかったことも多くあ

りました。この反省を次につなげたいと考えています。また、2月には奈良女子大学附属小学校の学習研究発表会に参加し、子どもたちが生き生きと自分について語り、自分の考えを持って授業に参加している姿をたくさん見せてもらいました。子どもたちが恐れずにたくさん自分の思いを話し、語る・聞く場面がたくさんある朝の会や授業の様子から、子どもの思いを引き出して聞き、学びにつなげることの大切さを感じました。

4月から、昨年度と同じ3年生の担任と、道徳・人権教育、外国語活動の担当をさせていただくことになりました。昨年度の反省を踏まえての実践を行いたいと考えています。6月には、再び奈良女子大学附属小学校を訪問することができました。様々な実践に出会うことで、自分の学校や自分自身のことをふり返り、見つめ直すことにつながっていると感じています。

今こうして教職大学院で学ぶことができているのも、現在の勤務校の先生方の協力があることです。様々な面で配慮してくださったり、サポートしていただいていることをありがたく思っています。昨年度は、教職大学院での学びを勤務校へ還元する機会をほとんど持つことができなかったことを反省しています。今年度は、少しでも何らかの形で還元できればと思っています。

この1年も、どうぞよろしくお願いします。

共に学び合う仲間を得て

ミドルリーダー養成コース2年/さくら認定こども園 西谷 知恵

知らない先生方に囲まれ、何を話したらいいのだと緊張して迎えた大学院入学から、早一年が経った。今では、カンファレンスやラウンドテーブルで顔を合わせると、自然と笑みがこぼれる、素敵な先生方とのつながりがたくさんできた。

その輪は、直接クロスセッションでグループを組んだ方にとどまらず、実践記録という物語の中で出会う方、院生に関わる現場で、信念を持って教育にあたられている方や丁寧に指導なさっている方、他大学で熱心に研究をされている方と、多岐にわたって広がっていく。そのひとりひとりとの出会いが、私にとってかけがえのない、大切な宝になっている。

これは、従来の保育から新たな保育へと大きく舵を切る、さくら認定こども園にとってもそうだ。公開

保育では、多くの先生が来園し、子どもの姿を見取り語って下さった。現場で生まれた悩みを月間カンファレンスへ持ち込むと、幼児教育に携わる先生からはもちろん、小学校、中学校、高等学校等、教育に携わる先生方からアドバイスをいただける。ラウンドテーブルでは、さくらの職員が報告者、聴き手として参加し、それぞれが学びとってきたものを園に持ち帰り、現場の先生方と共有しながら日々の保育に役立てる。保育参観では大学の先生が講演をしてくださり、保護者から好評をいただくと共に、新たな保育への理解も進んできている。毎日の終礼や月に一度の園内研修では、子どもの姿を通して実践を語る先生が増えた。さくらの職員が一丸となって、保育教諭

としての目を養おう、新たな保育を作り出していこうと、絶えず成長を続けている。

自分たちとは違った視点で幼児教育を捉え、意見をいただけるようになったこと、日々の実践を振り返り語るという時間が、意識して確保されるようになったことは、さくらの現場、保育教諭にとって大きく、価値ある変化だと感じている。保幼小連携の必要性が叫ばれているが、広がる教育の輪の中で知り合えた、彼らと手を取り合っていくことで、課題解決への道は明るい。

『教師とは、学び続ける人である。』カンファレンスで自身の悩み、弱音を漏らす度、おっしゃっていただく言葉だ。私たちは、悩み、もがき、苦しんで、そこから学んでいく人でいなければならない。教育者である限り、この学びの旅に終わりはしないのだ。大学院で、素晴らしく完璧に見える先生方も、その顔にやる気と情熱を残しながらも、ぶつかる壁に苦戦する自分を語ってくださる。実践記録を読んでも、教師の悩みなしに進む実践は、ほばないのではないか。目の前の子どもと向き合っているだけではつかめなかった学びが、様々な先生の語りの中から、実践記録の中から生まれている。続いてきた学びの旅路がさらに続いていくことを、実際にその路を歩んでこら

れた先生方から教えられている。決して多くを語らずとも、醸し出すオーラというのか、かっこよく、品があり、私もこうなりたいと心揺さぶられる姿だ。

日々の実践で立ち止まるとき、子どもと向き合いながら迷うとき、ふとこうして出会えた方の顔や、記録が浮かんでくる。憧れのあの先生だったら、この実践をどう捉えるだろうか。いつも穏やかに、子ども中心で語られるあの先生だったら、この子にどう関わろうか。あの記録に書かれていた先生の悩みは、今の私の悩みと通じる部分があるのではないか。今までにはなかった、広く新しい視点を持って、実践や子どもとの関わりを見つめ直すようになった自分がいる。

私の人生、毎日を変えたと言っても過言ではない、多くの素晴らしい先生方に敬意を表して、これからも彼らと共に、学び続ける保育教諭でありたい。そして、愛あるパワーでさくらの舵を取ってくださる園長先生、仁美先生をはじめ、そばで手を取り合い、どんなときでも温かく支えてくれる、チームさくらの仲間たちと共に、新たな保育の実現に向け、ますますさくら認定こども園の前進を図っていきたい。

保育改革4年目の憂鬱

ミドルリーダー養成コース2年 / 認定こども園 福井佼成幼稚園 松田 知峰

戸惑いと不安を抱えながら教職大学院に入学し、あっという間に2年目に入りました。日常の保育や業務で精一杯の中、月間カンファレンスに足を運ぶこと、たくさんの先生方の実践をお聞きすること、展望や思いを語り、自分自身の省察につなげていくこと・・・すべてのことが刺激的でした。

園では、昨年度まで、定期的に“なかよしタイム(遊びこみ)”を取り入れ、子どもが自由に発想し、取り組む遊びを通して、子どもが何を感じ、何を学びとっているのかを見取ってエピソード記録をとり、園内研修に生かしてきました。しかし、定期的に取り組むこの遊び方が、意図的なイベントになっていることに気づき、本来のねらいであった自由な遊びの広がりや継続とは意味合いが違って来たことを実感するようになってきました。

そこで、この違和感を職員間で話し合い、問題解決の糸口としてデイリープログラムを見直すことになりました。これまではトップダウンで指示待ちの状態だった私たちでしたが、園内研修でのセッションを重ねることで距離感が縮まり、子ども達の主体性の大切さを感じるようになったことで自ら意見を持ち寄り、話し合いに臨めたことは大きな成果でした。話し合いは、「朝の活動をどうするか？」に絞られました。従来は、登園するとまずは個々でピアノの練習、そして9時30分までが自由遊び、その後は朝の会、その日の活動をするという流れでした。その流れを変えるため、午前中はたっぷり遊べる時間として設定することを試みました。登園後、10時30分まで“なかよしタイム”とし、子どもたちにとって“定期的”だった遊びが、“日常”に組み込まれることとな

りました。自由な遊びに十分な時間を確保したことで、自分の好きな遊びに没頭し、工夫や視点を凝らしている姿が日常的に見られるようになりました。さらに、園舎隣接の園庭だけではなく、園庭隣の畑や野草園の第二園庭にまで空間を広げることを試みたことで、園庭の行きかみや遊びの姿にも変化が表れました。

また昨年度より、さくらこども園と和田こども園と我が園の3か園で公開保育研究会を立ち上げ、ミニ公開保育を行っています。それぞれの特色を持った保育を通して学び合い、刺激しあうことで自分の保育を見直す良い機会となっています。他園での取り組みは大変学べることが多く、また職員同士の交

流も図ることができ、楽しみの一つとなりつつあり、翌日からの保育に生かしています。

しかしながら、保育改革4年目となり、取り組みの体制が整ってきたことで達成感を持ってしまい、立ち止まっている自分に焦りを感じています。子どもの主体性、自身の主体性、同僚性など課題は見えるのに…。何とかこの状況から抜け出すため、同僚たちとアイデアを出しあい、子どもたちの姿を共有し、自分の方向性を見つけるべく、今後の教職大学院での学びや、子ども達との関わりを深めていき、何より保育の楽しさを見つけられるよう努めたいと思っています。

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

発達段階から育む力を考える

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 橋爪 志歩

教職大学院での学びも3年目を迎えた。長期インターンシップでは、小学校で3年生のクラスに入らせていただいている。これまで、M1のときには5年生、M2のときには2年生に入らせていただき、今年度は昨年度入らせていただいていた学年を続けて見られることになった。小学校では、3年生から新しく理科と社会の授業が始まる。今回は、私が理科の授業を参観したり先生と話をさせていただいたりして考えたことを報告したい。

3年生の子どもたちは今、理科の授業でハウセンカを育てている。私が毎週月曜日に教室に行くと、子どもたちがベランダで、「大きくなったから、植え替えをしたんだよ!」「私の曲がって育ってるけど大丈夫かな。」「みんなと一緒に芽が出なくてA先生から芽をもらったのに、最初の種からも芽が出てきたから、2つ育ててるんだ!」などと、自分のハウセンカについて話をしてくれる。このように大事に育てているハウセンカを、子どもたちは理科の授業では時間をかけて観察している。ハウセンカの芽が出始めた頃の授業を見させていただいたとき、子どもから笑いがおこった場面があった。それはA先生が、机の上で

どのように観察するのかということ子どもたちに説明していたときのことだった。先生は、「机にまず新聞紙を小さくたたんで置いて、その上にハウセンカのポットを置きます。」と黒板に絵を描きながら説明をされていた。A先生はまず新聞紙とポットの絵を描いた。それを見ていた私は「次は簡単に芽の絵を描くのかな。」と思いながら見ていたが、先生はポットの絵の上に平仮名の「め」を書いた。子どもたちは、「えー!?!」「め!?!」「そんなの出ないよー!」と笑っていた。私はこの場面がとても印象的で、放課後にA先生にお話を伺った。先生は、「簡単な絵だとしても、僕が芽の絵を描いてしまったら、どんな芽が出てくるかわかっちゃうからね。」と教えて下さった。子どもたち自身の目でしっかりと観察してほしいという先生の思いがあつてのことで、A先生はこの観察する単元を時間をかけて行っているということも教えて下さった。

また、A先生は数年前のあるエピソードも紹介してくださった。それは、先生が数年前同じように当時の3年生のクラスでハウセンカの観察の授業をされていたときのことである。A先生は、芽が出なかった

Kくんに対して、先生が別で育てていたハウセンカの芽をKくんに渡し、Kくんはそのもらった芽をその後の授業で観察していった。何度か観察を重ねると、A先生が「ハウセンカの芽だよ。」と言って渡した芽に対して、「僕のこれはハウセンカじゃない！！」と主張し始めたという。そこでA先生は、その言葉を否定せずに、クラスの子どもの前でKくんが自分の芽を紹介する時間をとった。Kくんは自分の芽を見せながら、「僕の茎はみんなのよりも太い。」「僕の葉の形はみんなのと違うし、なんだか付き方も違う。」「だから、僕のはハウセンカじゃないと思う。」というように彼なりに観察したことを根拠に話をしたのだという。その後その芽が成長し花が咲くと、それはなんとハウセンカではない花が咲いたそう。子どもたちもA先生自身も驚いたとおっしゃっていた。ここでも、みんな同じものを観察しているからといって視点を統一するなどといったことはせず、「観察する」ことを大切にするA先生の考え方を感ずることができた。その後の子どもたちは、Kくんの出来事から「観察しているいろんな方向から見ないと気が付かないこともある！」「他の人と比べることも必要だ。」「なんで葉はこんな付き方をしてるのかな。」というように、観察する視点を広げ、その後の様々な学習においても面白い発見が生まれるクラスになったそう。

今回、私が見させていただいた授業はほんの1時間の授業であったが、「観察する力」を育てることの大切さを学ぶことができた。3年生のはじめの段階で、子どもたちの「観察する力」を育てていくことで、子どもたちから様々な発見が生まれ、そこから「どうしてだろう？」という疑問が生まれてくる。子どもたちがこれからの理科の授業や他の教科で主体的に発意をもって学んでいくためにも、自分の目で観察をして発見ができる土台をつくっていくことが大切だと学んだ。今後、子どもたちの観察する時間を参観するのが楽しみである。

私は、インターンシップで目の前の子どもたちを見ていると、特に新しい学年に入った4月には、「この子たちは、前の学年でどんなことを学んできたのだろう。」「これからどんなことができるようになるのだろう。」と思うことがよくあった。このことをストレートマスターが集まる木曜カンファレンスで話をする、ある先生から「橋爪さんは、発達段階が気になっているんだね。」と声をかけていただいた。初めにも述べたように、これまで入ったクラスを見てもそうである。この3年間では自分の希望で低学年・中学年・高学年を全て経験してきた。今回、3年生という発達段階で育むべき力を学んだように、発達段階を考えながら、今後も授業参観や授業実践を行っていきたいと考えている。

学びと学びをつなぎ合わせるカギ

授業研究・教職専門性開発コース 3年/福井市中藤小学校 服部 哲也

新元号「令和」という時代になり、早2か月。そして、教職大学院に入学してからは3年目の夏である。最上級学年ということもあり、この教職大学院のスタイルにもだいぶなれ、ベテランというプレッシャーを感じing中で、常に分からないことにぶつかり、矛盾やジレンマと葛藤を繰り返しながら、日々インターンや木曜カンファレンスに取り組んでいる。

さて、そんな中で私は今年になって特に力を入れていることがある。それはインターン記録である。教職大学院のストレートマスターでは当たり前なことなのだが、日々インターン、木曜カンファレンス等では感じたことや考えたことなどを常に記録している。インターン記録は私たちがインターン先の教育現場において実際に体験してきた実体験について書かれた、いわば日記のようなものである。これをもとに木曜カンファレンスでは省察し、見通しをもち、今後の展開について考え、再構成していく。私が記録に力を

入れ始めたきっかけは、これまで2年間の記録を読んだとき、一貫性がなく、2年間の記録をまとめることに苦労しているからである。私のこれまでの記録を見ていると、どうやら子どもの行動や言動、そして、それらの行動の背景などに注目しているようだ。「なぜ子どもはこの行動をするのか」、「行動ではこうしているのに、どうしてこのような言葉を発してくるのか」を常に考え、記録をしているのである。しかし、子どもの記録だけでは学校や教育、授業などの理論に結びつかないのである。

入学当時、理科教育に力を入れようと、理科の授業記録ばかりを重点的に記録していた私にとっては、大きな心変わりである。この心の変容が矛盾やジレンマを生み、記録の書き方が少しずつ変わってきたのだと思う。このような矛盾やジレンマを明確にし、今までの記録と記録を結び付けていくため、細かく、丁寧に書くことに力を入れている。学校生活面での

子どもの見取りに関する記録によって、子どもの成長、道徳性、性格など行動面における視点においては徐々に広がってきたのは、もちろんのことである。そして最近では授業記録を取ることに力を注いでいる。去年度の授業実践では子どもに深い学びのある授業を行うことができなかつたように思う。原因は私が授業を見る視点が十分に備わっておらず、「どのように深めていけばよいのか」、「どこを深めるべきなのか」を明確ではなかつたからであると考察する。M1当時、教職大学院に入ってからすぐのときには、理科での授業記録を中心に取っていたのだが、いつの間にか子どもの行動に多く目が向くようになり、すっかり授業記録のことに目が向きにくくなりつつあったのである。授業記録を重点的に記録することで、子どもが「どのように学んでいるのか」、「どこが深い学びにつながっているのか」など、学びの面での記録を取る視点を十分に身に付けていきたいと考えたのである。また、M1当時は記録を取る意味というものが分からなかつた。「何を記録に取ればいいのかだろう。」とか「時期に取れるようになってくるから大丈夫。」だとか、そのような事ばかり考えていた。これはきっと授業記録や子どもの記録を混同させて考えていたからかもしれない。子どもの記録も授業記録もつながりはあると思う。私は偏った記録の取り方をしていたために、つながりのない記録になってしまったと思う。私はこの2年間で、そのときの思いや考えはそのときにしか浮かんでこないことや、様々な視点で記録を取ることで理論と実践が結びついていくことを学んだ。今まで取り組んできた意味をさらに捉えかえし、それを結び付けていくことをこれからしていきたい。

また、記録とは別に目標に思っていることがある。私はこれまで高学年に入らせていただき、2年間イン

ターンシップに取り組んできた。今年は新たに低学年で1年間インターンシップに取り組ませていただいている。高学年と低学年ではそんなに大きな違いはないものの、どこか雰囲気が違うような不思議な感覚であった。私が2年前に初めて高学年に入らせていただいたときと似たような感覚だった。今年は環境が変わり、また新たにスタートをきった。その中でやはり子どもとの信頼関係をつくっていくことからじまった。今まで、子どもの見取りや子どもに寄り添うことを常に考えてきた。そして、低学年入らせていただき、より一層子どもに寄り添うことが求められる気がした。高学年では、考えて行動ができる子どもが多かつたため、軽く背中を押してあげるだけで行動ができていた。低学年では、先生方が常に丁寧に子どもたちと接しており、子どもの行動を1つ1つしっかり見ている。細かい行動や言動も見逃さない。細かく丁寧に常に気を配って指導にあたっていく先生方を見て、「私もできるようになりたい!」と思ったのである。私のもう1つの目標として、去年度までできなかった子どもに対してのアプローチを考え、実行していくことである。

木曜カンファレンスでは、そんな多くの理論を様々なものの見方や考え方をもつ院生と語り、学ぶ合うことのできる貴重な場である。そんな木曜カンファレンスも毎年、少しずつではあるが、授業の在り方が変わってきている。大学院生の人数、院生のニーズによって、取り組み内容が少しずつ変化してきている。私が理論を構築する場としても有意義な時間にしていきたいが、M3の立場としてもM1やM2の学びを支えていきたい。最後になるが、教職大学院の最後の年をより有意義な時間にできるようにインターンも木曜カンファレンスも1つ1つ大切にしていきたいと思う。

5 月合同カンファレンス報告

自分を整理し捉えなおす

授業開発・教職専門性コース M2/福井市明新小学校 津野 慎平

教職大学院に入学してから1年と2ヶ月が経とうとしている。去年まではインターンシップで特別支援学級に入らせていただき、今年からは交流の学習先である通常学級に入らせていただいている。また、今まで週間カンファレンスでは、卒業した先輩のサ

ポートを受けながら企画を行っていたが、今年からは何も知らない後輩を迎えて企画を行っていく。そういった新しい風が自分の中では吹いていた。教職大学院2年目ではあるものの新鮮な気持ちでいた。そのような気持ちの中で、5月25日に合同カンファ

レンスがあった。合同カンファレンスでは、グループに分かれ、今の学校での自分の取り組みや現状を話し合い、お互いの悩みに共感したり、現状がより良くなるように提案し合ったりする時間があった。グループが一緒になった先生は、学校の中で授業改善の研究会を企画し、新しい学力観に対応した授業改善を行っていった話や、授業改善のための研究を気軽に行えるよう、そういった習慣を設けた話などを行っていた。その中で、先生が苦勞されたことや、上手くいっていないことなどに共感していた。順番的に私が自分の取り組みや現状を話す番になった。自分が行おうとしていることは学校の現場のどういうこととつながるのか、何に生かせるのかを現職の先生ならどのように捉えるのか、また、自分が抱えてきた悩みに対して、現職の先生はどのような見え方をされるのか聞いてみたかったので、とりあえず今の自分のことを色々話してみようと思っていた。実際に話した場面は以下である。津野「今年から M2 になって、ストレートマスターの 1 年生を支える立場として週間カンファレンスの企画を行うことになりました」先生方「へー」津野「また、インターンシップも去年まで特別支援学級に入っていましたが今年からは 2 年生の通常学級に入りました。」先生方「ふむふむ」津野「週間カンファレンスの企画では、お互いのやりたいことがぶつかることが多くありまして、悩むことがありましたが、今は自分の中で自分のやりたいことと相手のやりたいことのつながりを考えるようにすると、自然と相手と自分がぶつかることがなくなっていました。」先生方「ふーん」私「そういったことが最近はありませんか？」先生方「何か気になったこととかありますか？」他の先生方「・・・」私「・・・(やっぱり現職の先生方にはイメージしづらく共感しづらい経験だからしゃべりづらいのかな)」

このときの私は、現職の先生方にとって伝わりにくい話し方をしていたため、もっと自分の立場が共

感しやすく想像がしやすくなるように話すべきだったと反省していた。しかし、どういう風に話せばいいのか具体的には分からずにいた。このことを後日に、教職大学院の先生に話した。その話が以下である。津野「なかなか、話が盛り上がりず周りの先生方は共感しづらかったのかなと思っています。」先生「もちろん、津野くんの伝え方もあるだろうけど、別に盛り上がりなくてもいいんじゃない？合同カンファレンスは、自分の実践を語りながら自分で整理し直して(自分に)落とし込んでいく場でもあるし」津野「確かに、そのときは周りを気にしすぎてしまっていたかもしれません」先生「あと、私が実践の聞き手だったら、話し手の悩みやつまづきが話にあった方が、自分に近く感じられて共感しやすいかな」

今まで私は、自分のことに対して他の人の視点を知りたいばかりに、周りを気にし過ぎて、話が發展しているか沈黙になっているか伝わりにくくなかなどばかり目がいくようになっていた。もちろん、他の人の視点を知るために伝わりやすさを考えることは必要である。しかし、合同カンファレンスは他の人の視点を知ることができるだけでなく、自分で自分のことを語ることによって整理し、捉え直すこともある。教職大学院の先生との話の中で、そういった良さに気づくとともに、次につながるようなポジティブな気持ちになれた。また、共感される話に関して言えば、合同カンファレンスの時に私の話しは自分のやったことの報告で終わってしまっている。そのため周りの先生方にとって共感されにくかったのではないかと考えた。報告だけではなく、今の自分のつまづきや悩み、課題に思っていることなどを話せば、聞き手の以前に悩んだ経験により置き換えやすく、共感されやすいのかもしれないと気付くことができた。5 月の合同カンファレンスは、カンファレンスの意義と共感しやすい伝え方について考える機会になった。

奈良の地で歴史を紡ぐ

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/奈良女子大学附属小学校 藤田 若奈

私のお世話になった奈良女子大学は、明治 42 年に奈良女子高等師範学校として開校以来、今年の 5 月に創立百十周年を迎えた。教員養成としても歴史があり、私も本学で教職を学ぶことができたことに誇らしく思う。大学では、創立百十周年を記念して式典が行われた。それと同じ日、奈良会場での 5 月の合

同カンファレンスに参加させて頂いた。奈良会場には、関西で活躍される先生方が多く集まる。おもしろいことに、同じグループで、私の母校である奈良女子大学附属中等教育学校でお世話になった元担任の先生と、同じ卒業生である先輩の先生とご一緒させて頂いた。元担任の先生の前で教育を語ることは、少し

恥ずかしくもあり、不思議な感覚である。何はともあれ、奈良会場ではこじんまりとアットホームな雰囲気に入れられ、ゆったりとした時間の中で先生方と語り合うことができる。

ありがたくも全体場で報告する機会を頂き、多くの先生方からコメントを頂くことができた。ここでは、そこで考えたことや大切にしたいと思ったことを2つ紹介したいと思う。

＜自分の中に「基準」を形成していくということ＞

1年目のインターンシップでは、日々、「基準」に迷いながら子どもと接していた。最初の頃は、学習中におもちゃで遊んだり、隠して本を読んだり、輪ゴムを飛ばしたり・・・といった子どもの行動が気になって仕方がなかった。「おもちゃを出してはいけない」「教科書を開く」「輪ゴムは飛ばさない」と、ねちねちと注意をしていた。「教師として振る舞わなければ」と必死になり、目の前の子どもをよく見ずに、取って付けたように子どもたちに語っていた。

そこには「自分」というものがなかった。それに気づかせてくれたのは、大学で支えてくださる先生方であり、インターンシップでお世話になっている先生であり、何よりも子どもたちであった。決まりやルールを、「こうしなければならぬから、こうなさい」と押し付けるのは機械的であり、そこには私の「思考」は働かない。「基準」を何も考えずに「実行」するのではなく、「基準」と「実行」の間に、自身の「思考」や「感情」があることが大切なのである。相手を見て、相手の言葉に耳を傾け、理解しようとした上で決まりやルールの大切さを伝えていく。教師はその場で瞬時に判断しなければならぬが、そこに

は迷いや葛藤があり、そのことに向き合うことが不可欠である。そして、その迷いや葛藤を経て、今はまだ不安定で未熟な私の中の「基準」が形作られていき、やがて「自分らしい」指導や支援につながっていくのだと思われる。そうなれるよう、迷いや葛藤から目を背けずに、目の前の子どもたちと真摯に向き合っていきたい。

＜自分の個性を言葉にしていこうということ＞

私が報告の時に用いた言葉に、ある先生が素敵だと仰ってくださいました。嬉しかった。私の個性が、言葉として滲み出ているのだという。そう言われるまで、何とも思っていなかった。言葉の選び方で、「私」という人間性までも伝えることができるのである。ものを書くとき、書きたいことはあるのに、イメージとしては浮かんでいるのに、靄がかかっている上手く言葉で言い表せないもどかしさを感じることもある。諦めてそれを言葉にすることをやめたり、ありきたりな言葉に押し込めたりしてしまいがちである。しかし、いかにその靄がかかった部分を伝えていくかが、「私」を伝えるための肝となる。長期実践報告を書く際の課題の一つとして、常に言葉に敏感であり、私らしい言葉を見つけ、慎重に選んでいくことを心掛けたい。

カンファレンスでは、私の抱える小さな悩みにも、あたたかく寄り添って聞いてくださる。元担任の先生も、先輩の先生も。教師を目指していると、期待が高まる一方で不安な気持ちも募る。このような場があるのは、本当にありがたい。いつの日か私も、この場を守り、受け継ぎ、そして次代を担う人々に渡していく、そんな教師になりたい。

5月合同カンファレンス報告

学校改革マネジメントコース2年／小浜市立小浜小学校 小坂 恵

5月合同カンファレンスのテーマは、『学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく』であった。

このテーマに沿って、大きく3つのことに取り組んだ。以下、それぞれについて内容と気づきを記述する。

一つ目は、福井市六条小学校の寺前公恵教諭の実践発表である。寺前教諭の発表では、勤務校で地域と連携しながら進めた「総合的な学習の時間」の実践が報告された。地域の特産物の一つであるショウガを題材に、これまで廃棄していた葉の部分の活用を考

えたり、商品化のためにアイデアを出したりするといった活動である。一連の報告を拝聴し、単元構想の工夫、グルーピングの工夫を学ばせていただくことができた。

学習サイクルを「まず知識を獲得し、それを使って学ぶ」という構造ではなく、「まず体験、その後、考えさせ、課題を見つけさせる」というふうにした点に、この学習を探究的なものにする鍵があると感じた。地域に出向き、まず体験することが子どもの心に灯をつけ、「発意－構想－考案－実践」の主体的な学習サイクルにつながったと考える。

また、生活班ではなく、ショウガが好きな子たちのグループ、好きではない子たちのグループというように、指向に沿ってグルーピングし、学習を進めておられた。結果、学習に深まりが出たとのことで、個々の興味の方向性を尊重することの効果が認められた。実践全体を通じて特筆すべきは、実践を通じて寺前教諭が若手職員とベテランとをつなぐ動きをとられている点である。学校改革マネジメントコースでも学ぶ仲間が、このように世代間をつなぐ働きかけをされていることに、よい刺激を受けることができた。

二つ目は、入試問題の確認である。今後求められる学習がどのようなものであるかをつかむために、実際の試験問題である「大学入試センター大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）現代社会」，「慶應義塾大学総合政策学部 小論文」，「早稲田大学 新思考型入試」，「福井大学教育学部小学校課程推薦入試」，「全国学力・学習状況調査 小学校国語」に目を通した。以前、中学校や高校の先生から「知識注入型の学習から探究型の学習への転換が叫ばれているが、試験問題へ対応する必要から授業を変えにくい。」と聴いていたが、いよいよ試験問題も変わってきているということを確認できた。私は、これらの試験問

題から「課題解決のために、複数から最も効果的な資料を選ぶ力」，「相反する論文を読み、それを踏まえた上で自分の考えを構築し、表明する力」が求められているととらえた。このような力は、短期間で身につくものではない。幼児期の遊びの中での試行錯誤から既に修得（習得）が始まっており、小中学校、高等学校で洗練されていくものであろう。自校では、相互に授業を見合い、研究会を持っているが、これらの力が積み上がっていくよう、めざすベクトルをそろえる必要性を感じた。そのためにも、学校に戻り、カンファレンスでいただいた試験問題を全員に紹介した。

三つ目は、専攻するコース別の協議である。学校改革マネジメントコースは、『学校の組織の現状とその課題を探る』というテーマの下、グループ協議を行った。このグループ協議の形態は、福井大学の大学院の特長である。入学時、学校種も年齢も地域も異なる方との語らいは効率的でないように思っていたが、今は、職場における意思統一の重要性、協働の在り方を再確認できるものだととらえている。今回も、西川先生、中川先生の心地よいファシリテートにより、自分と同じように勤務校で奮闘する仲間と語らい、私も小浜小学校というフィールドで翌週からまたがんばろうと気持ちを新たにすることができた。

「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」

学校改革マネジメントコース 2 年/越前市神山小学校 室谷 知徳

1. 実践報告

「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらくーその意味と実践ー」という演題で、辻崎先生から、武生高等学校でのミドルリーダーとしての取り組みの様子を聞かせていただいた。「授業改善プロジェクトチーム」を立ち上げ、多くの先生と豊かなコミュニティを形成し、試行錯誤、切磋琢磨しながら授業力向上に努めている様子がひしひしと伝わってきた。県立の進学校である武生高校で、教科や年齢を超えた集団で同じベクトルを向いて取り組んでいることに、より感心させられた。そして、その中心的役割を担っている辻崎先生は、同僚教師との協働をうまく進められていることに感心した。

2. セッション

それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで話し合い、捉え直し展望をひらくために、こども園から中学校までの先生方、しかも 20 代前半か

ら 50 代という世代・校種・公務分掌を越えた交流を行うことができた。特に、幼稚園の先生からは、日ごろはあまり聞けない、保育内容や園児の発達の様子などを聞かせてもらい、保幼園と小学校との連携を図る上でのヒントを得ることができた。

同じグループの先生方とのセッションを通して、各園・学校における課題とその解決を図る協働の様子を聞くことができた。自分と同じような課題を抱えている先生もおられれば、若いときに自分も感じた心労だったなと共感できる事柄など、多様な内容の情報交換ができ、大変有意義な一時であった。

3. 資料を読む

「求められる学習と変わる試験問題」の演題の下、教職大学院の遠藤先生から解説していただいた。「大学入試センター 大学入学共通テスト 平成 30 年度施行調査（プレテスト） 現代社会」では、多数の資料が提示されており、その中から必要な情報を選択する問題が特徴的であり、自分が高校時代に解いて

きた設問とは大きく異なっていることに驚きを感じた。これらが、今後、児童生徒に求められる資質・能力であり、これまでの学習の転換が迫られていることを確認することができた。

4. コース別研修

学校の組織の現状とその課題を探るために、それぞれの先生方の各学校での取り組みの現状と課題を話し合った。小学校勤務の一人の先生は、「授業が楽しい」と答える児童の増加を目指し、教職員が同じベクトルで指導に当たっている現状を語られていた。その中で、対話的で深い学びに向かう以前に、聞く力が十分に定着していないという課題を持たれていた。また、教育総合研究所に勤務される先生からは、教育相談センターでの現状を聞かせていただいた。学級経営プログラムや、いじめ・不登校の未然防止、ピア・サポートといった専門的な取組の様子を知ることができた。小学校勤務の、もう一人の先生は、研究主任として学校全体をマネジメントされており、校種や公務分掌が同じでも、学校によっては仕事の内容や

量が大きく異なることを改めて感じた。同じM2ということであるが、順調に長期実践を進められていることに感心した。

教職大学院の先生からは、一人一人の現状に対し、的確にアドバイスをいただき、長期実践を進めるにあたり、今後の大きなヒントとエネルギーを与えていただき、大変有意義な一時となった。

5. 最後に

2019年度が始まり、2ヶ月が過ぎようとしている。2年目ということもあり、見通しは利いているものの、日々の勤務に追われ、長期実践を進める余裕が正直なかった。今回のカンファレンスを通して、多種多様な院生によるグループ編成のお陰で、若い先生方のエネルギーや、ベテランの先生方の実践の豊かさを感じることができた。6月のラウンドテーブルでより学びを広げ、より良い実践に繋げていきたい。

全国学力・学習状況調査を終えて思うこと…

学校改革マネジメントコース2年/敦賀市立角鹿中学校 小島 義和

国の「学力・学習状況調査」というものさしについて

国際的に比較されるPISAやTIMSSは、他の国との比較という点において、「ものさし」であり、そこでの差を「課題」として認知するのであれば（必ずしも適切な課題が把握されているわけではないと考えるが…）それについて対策を講じていく必用はあることは理解できる。かつて「PISAショック」があった後、この「ものさし」で「課題」と捉えた部分は、立派に？解消していったように感じている。この「PISAショック」の時期と、「総合的な学習の時間」の重視の重なり方に複雑な経緯はあることはさておき、この「PISAショック」と「全国学力・学習状況調査のクローズアップ」を重ねて見てしまうようになった風潮が、間違いの始まりのような気がしてならない。

特に教育現場で、自分たちが「テスト」を「100点満点」という枠の中の「ものさし」として考えてしまう“癖”と“思い込み”で、「学力・学習状況調査」を総合的な学力を測る「ものさし」として捉えているように見える。この調査は、我が国の教育上の課題を明確化するための調査である。「課題や原因は探したところから見つかる」ものであり、限られた「問題」

という“ライト”で照らし出される部分の「課題」を明らかにしているものであり、ある意味では、「課題も無く、完璧な結果が出てしまう」ことがあれば意味をなさないものである。この“ライト”で見える姿が、学力の全貌でも何でも無いのは、当たり前なはずである。もっと余計なレベルまで考えると、万が一「現在の教育は世界水準としても高く、課題など見当たらない完璧に近い状態」と捉えられれば、教育界やそれに関わる学問の世界の予算は当然減っていくはずである。今の教育では不十分である、もしくは発展していく必要があることが明白であることを、官僚がしっかりと見えるようにしていくことが求められる。それが「学力・学習状況調査」であり、決して総合的な学力を測る「ものさし」ではないはずである。地方自治を担う際に、国内での差について課題を感じ、そこに人・物・予算をつぎ込むことは大切であり、その意味では「ものさし」としての機能があってもよいと考える。しかし、教育界・教員界が、あたかも子どもの総合的な学力がそのものさしで測られているかのように反応するのは、間違っているように感じる。古いようだが、学力とは何であり、どのような力をつけようとするのかは、ある種の「哲学」としてあ

るはずでは無かったのだろうか。その哲学が、怪しくなったり、わからなくなったりしたことはないはずである。その不易な部分へのアプローチの方法は、“流行の最先端”が注目されてもよいと思う。まるで、課題や弱点が、教育界や子ども達の「劣っている部分」であるかのように扱うことはあってはならないし、それは学習者に対して失礼であると感じる。現場でも、今日のカンファレンスの中でも、ふとした学力調査の結果にまつわる話題の中で、課題として明らかになった部分を（課題が当を得たものであるかどうか不明なまま）劣っている部分ととらえているような匂いを感じてしまう自分がいるのは、偏見・偏屈からくるものなのだろうか…。

私は子どもへの指導の中で、よく、ペンを手に持って勢いよく手を上げて「このペンは高い所にあるか低いところにあるか？」と問う。それは、高い低いというのは「〇〇よりも」という基準があって言えるこ

とで、基準が曖昧では高いも低いもないし、まして思い込んでいる基準では間違った判断をするものだという私の説教パターンである。学習状況調査の質問を毎年見るたびに、また、その結果を語る場面に出くわすたびに、何の基準もなく応答させたものを、あたかも実態であるように語ることが奇異でならない。全く非科学的である説明に踊らされることに、義務教育を始めとした教育が、何か、人の判断する力を奪ってきたもしくは育てていない証なのかとまで思ってしまう。この学習状況調査と抱き合わせであること自体が、私が「学力調査」の値打ちまで疑ってしまう原因になっているのかもしれない。

正しいと思っていること、当たり前なはずのことに疑問を持つことこそ、学問の出発点であることは、不易なものであると、頑固さを強めた、5月の雑感（学び？）である。

研究集会・公開研究会などの報告

信州大学教育学部附属松本学校園の公開研究会に参加して

福井大学教職大学院 准教授 血原 正純

5月17日（金）に信州大学教育学部附属松本学校園（以下、松本学校園という）で開催された公開研究会に参加しました。幼小中全体研究テーマ「未来を拓く学校づくり」を掲げ、「たくましく心豊かな地球市民」を育む12年間の幼小中一貫教育の姿とはどのような姿なのか、幼小中学校の教員が一体となって追究していました。

松本学校園では、幼少中学校の子どもたちに共通する顕著な“よさ”として見いだした、子どもたちに付けたい「3つの力（自己表現力・課題探究力・社会参画力）」を定めていました。特に子どもたち自身が「思いや願い、問い」をもち、「3つの力」を発揮し、様々な資質・能力を巻き込みながら学んでいくプロセスを大切に単位を構成し、授業を創造しているところに感銘を受けました。また、12年間の幼小中一貫教育で育む子どもたちの姿を共有できる環境

と、異校種の子どもたちの成長を見取り、その姿を常に目の当たりにすることができる環境のもと、「学びの統合化」を積極的に図っているところは、カリキュラムマネジメントの視点でも参考になりました。

公開授業では、中学2年生の総合的な学習の時間を参観しました。90分という公開の時間の長さに驚きましたが、福井県内中学校の中には、2コマ連続で総合的な学習の時間を時間割上に位置付けることもあり、2コマ分の授業を見せていただく機会が得られたことは貴重でした。「『あめの聖地松本』のために」という題材で、それぞれの思いの交流を通して、「あめの聖地松本」を考える学習に取り組む子どもたちの姿には、活気がありました。本時は、子どもたちが広報・調査・あめ作りの3つのグループに分かれて、それぞれが取り組んできたことの中間発表を行い、地元のあめ製造店3社のあめ職人からアドバイ

ス等もいただきながら、今後の展望をもつことをねらった授業でした。広報グループでは宣伝チラシ案を作成した時のコンセプトを説明した後、学級全体で意見交流をしました。しばらくすると、「参観の先生方からもアドバイスをもらえませんか。」と男子生徒が切り出し、議論が教室中に広がっていきました。さらに、3社の職人からお話をいただいたことで、広報グループのチラシ改善に向けたやる気は高まり、授業終了前のグループでの話し合いでは改善案が次々と出されました。また、あめ作りグループでは試作のあめを級友全員と3社のあめ職人に試食してもらい、級友からの評価や感想はもちろん、あめ職人からの評価やアドバイスは、次の改良への第一歩となり、さらなる探究活動を進めていくきっかけが形成されていきました。一方、調査の歴史グループでは質疑応答の場面であめ職人に対して、「僕たちの調査活動は失業状況にあります。」と伝えていました。現時点でのグループ全体の困り感を、大変おもしろい表現で、上手に訴えていました。あめ職人の方の回答が、「松本のあめに関わる歴史は解明されていないことが多いです。」という内容で、子どもたちはすっきりすることができず、モヤモヤ感が残ったように見えました。逆に言えば、この困難な課題を解決しようと努めていくことが課題探究力を高めるチャンスで、社会参画力を培うことにもつながっていくと思われました。

その後の研究会では、この総合的な学習の時間は学級総合と呼ばれ、3年間にわたる壮大な探究活動が繰り広げられていくことを知り、さらに驚きました。また、「学級総合」の時間を、今日の90分間の公開授業で語ろうとした自らを反省させられた時間でもありました。学級の全員で1年間かけてテーマを探り設定し、その後、調査・まとめ・考察を複数サイクルにわたって行いながら探究の質を高め、納得解を見つけていく学習プロセスは「3つの力」を培い、子どもたちの学び続ける姿を生み出し、成長を促してきたのでしょう。また、今日の公開授業の探究活動を支えていたものは、中学1年生で取り組んできたテーマを決める学習プロセスにあり、問いを見いだす学習プロセスが「学級総合」の生命線であることに気付かされた瞬間でした。本探究活動の始まりでは「松本の伝統工芸—松本民芸・家具—」「松本の宝—あめ—」「松本PR」「スポーツ」の4つがテーマの

候補となり、話し合いをくり返しながらテーマを絞り込んでいく中で「松本の伝統工芸—松本民芸・家具—」「松本の宝—あめ—」の2つが残ったそうです。その後、学級の全員で木工体験やあめづくり体験を職人の方に教わりながら行った上で、あくまでも話し合いでの決定にこだわって議論を続けたことも紹介されました。特に、最後まで家具を推している男子生徒に対して、「（普段から周囲に認められていない状況にある）〇〇くんが学級総合が一番がんばっているの、わかっているよ。〇〇くんなら、あめの活動でもがんばれるよ。」という女子生徒の発言で話し合いがまとまり、全員が納得して「『あめの聖地松本』のために」というテーマに至った学習プロセスが、公開授業の子どもたちの姿の支えになっていたことを知りました。まさに「学級総合」の時間において、子どもたちは問いを立て、問い直し、問い続ける学習プロセスの中で、「3つの力」を十分に発揮しながら学び続けている姿を見せてくれたのでしょう。

公開研究会のまとめとして、文部科学省初等中等教育局視学官 長尾篤志 氏と福井大学理事（副学長）松木健一 氏によるパネルディスカッションが行われました。「校種・教科等の枠を越えて資質・能力を育成する実践とは」というテーマで進められ、松木氏から提唱された「ヒトの進化を決定づけた学習活動の本体を稼働させながら、自然環境や社会状況の中で、知識・技能を創造する」学習プロセスは、12年間の一貫教育に取り組んでいる松本学校園に学ぶ意義や価値を再確認させてくれました。また、松木氏の「子どもが自己評価において『今日の学習で学んだことは、〇〇です。』と言えることは、わかったことを共有したいという子どもの気持ちの表れで、子どもの資質・能力の一つであると考えられる。」というまとめの言葉にも納得させられました。

最後に、福井県においても「園小中高連携」が大切であると認識され、その取組を長く進めています。中学校の教員が幼児の姿や幼児教育を実際に参観しているケースは大変少ないと感じています。その中で松本学校園のように、園小中のすべての教員が幼児の姿や幼児教育を実際に参観し、その様子をすべての教員で語り合う機会を設けていることは、発達段階を見通して子どもに付けさせたい資質・能力を共有することにつながり、福井県が進めている18年教育においても参考としたい取組でした。

奈良女子大学附属小学校学習研究集会に参加して

福井大学教職大学院 准教授 血原 正純

6月8日(土)に奈良女子大学附属小学校(以下、奈良女子附属小という)で開催された学習研究集会に参加しました。研究主題「個の学習能力を育てる『奈良の学習法』～単元の本質を見極めて、個の学び・共同の学びをつくる～」を掲げ、「この単元で、子どもにどんな能力を育むか」を明確にして、それぞれの子どもの追究を活性化し、それらをつなぎながら学び合い、多様な能力や個性的な才能を引き出すことを目指していました(①ここで言う「学習法」とは、大正時代の主事であった福井県勝山出身の木下竹次の指導の下、生活発展主義・合科主義・自律的学習という理念をもって創始されて以来、今日まで私たちが受け継いで取り組んでいる教育実践方針を言います。②戦後には新教育の樹立にあたって重松鷹泰主事を迎え、それまでの学習法の理念を継承しつつ、新しい教育実践形態として「しごと」「けいこ」「なかよし」からなる教育構造をもつ「奈良プラン」をうち立てました。この三つの柱で構造化された「奈良プラン」は、その後「奈良の学習法」と呼び交わされて、戦後も日本の教育を先導し、歩み続けてきました)。

公開授業Ⅰの3年月組の国語では「もうすぐ雨に」を教材に、独自学習を活かした相互学習により読みを深める学習が展開されました。「自分の考えをもって対話にのぞむことが大切で、子どもたちが思いや考えを主体的につなぎ合い深めていくため、独自学習で何を課題とするかがカギで、教師が見通しをもって単元を構成する授業力が欠かせません。」これは、授業者の先生が協議会で語っておられた言葉です。この授業で見られた子どもの姿を通して、「子どもたちが思いや考えを主体的につなぎ合う」とはどういう姿なのか、私自身が考えさせられたことを紹介します。授業の最後にMくんが初めて手を挙げて指名され、「今、気が付いたのですが…(中略)この物語の主人公の気持ちが天気表に表れています。」と発言し、授業者の先生に「もう少し詳しく言える?」と問い直され、「晴れだったら明るく、動物が言わなくても気持ちはわかっていただけれども、雨だと動物もしゃべらないし言葉もわからないので、心も沈んでいます。」と発言を続けました。多分、「晴れの日には動物の気持ちがわかり、主人公の気持ちも晴れ晴れしている。雨の日には動物の気持ちがわからず、主人公の気持ちも

雨である。」と解釈していたのであろうと私は察しました。「他の子の考えと自分の考えとを比べて聴くとは、他の発言を自分なりに解釈し、自分の言葉で表現できるように努めていく中で、なるほどと思うか、いや違うと思うかなど試行錯誤しながら自分の考えを再構成していくこと」と私は考えています。教師は子どもたちに他の考えと自分の考えをつないで聴くよう、比べて聴くよう促しますが、「つなぐ」「比べる」とはどのような思考なのか、どのような行為なのかを子どもたちが理解していると、子どもたちの発言も「〇〇さんは△△と言っているのだと思いますが、私は(も)××と考えます。」とつながりや比較を意識した対話が生まれてくると思われます。奈良女子附属小の子どもたちの資質・能力から考えますと、対話の質を高めることは十分可能であると感じました。また、公開授業Ⅱの4年星組の体育では、鉄棒・跳び箱・マット・肋木・はしご・平均台という器具に対して、自らがやりたい、やろうと思っている運動を考え、自ら精一杯表現しようとする子どもたちの姿が見られました。当日に配布された協議会資料に記述されていた「その子にとって大切だと思える運動をそれぞれに追究できる学習」が、まさに展開されたと考えます。授業者の子どもを認める声かけが積極的に行われ、「何に気をつけてやっているの?」「どのようにやっているの?」と授業者が一人の子どもに語りかけ、子どもが工夫していることを語る場面を多く見かけました。子ども自らがやっている運動の工夫を言語化させることで意識の高揚を図り、その後、実際に運動表現させて、認める評価を子どもに戻す関わり方は、子どもの学びに向かう力に大きく影響を与えていたと思われます。ふり返りの場面では子どもからバランスに関する内容の語りがあったことで、授業場面で見られたバランスを取るコツを紹介していました。その後、「バランスのコツとは何か、また考えよう」と子どもたちに課題を投げかけて授業が終わり、次時の学びに向かう力、ひいては生涯にわたって運動に親しみ続けることにつながる終末展開だったと感じました。

学習研究集会の最後に、同志社女子大学現代社会学部現代こども学科准教授 吉永紀子 氏の講演会が行われました。「自律的に学ぶ子どもたちが育つ授業の創造—対話を通した個の育ちを見つめて—」とい

う演題で、吉永氏が奈良女子大学の院生時代から「奈良の学習法」に関わってきた中で、この学習法には時代が変わっても変わらないものがあり、自律的に学ぶ子どもたちが育つ授業をどのように創造していくのかについて語られました。特に、教師が自律的に学ぶ子どもたちの姿をどう見るか、そして、子どもたちを参観しその姿から学ぶ意義は何だろうか、問題提起されました。例えば「なぜ、彼はそう語れたのだろうか」「何が彼にそう語らせたのだろうか」という視点を教師がもつべきであろうと、強調されました。つまり、教師にとって子どもと対話をするということは、子どもたちの発言をその背景も含めて解釈することであろうと、私なりに捉えました。さらに、吉永氏から「子どもたちが語る、自律的学習の意味」として、以下の3つが紹介されました。

・みんな一人一人違う意見が持てる。気になることに対しての答えも一つじゃなくて、いろんな考えを持つことができる自由なところ。

・「自分で考える」ではなくて「みんなの意見を聴いて自分で考える」。考える力もつく。

・「他の人とは違う自分の意見、自分しか言えない意見を持とう！」と思うことができ、だんだん自分の意見、自分のことを知ることができる。

他者や対象があって自分の学びがあり、自律的に学んでいることを心地よく感じている子どもたちの姿を見ることができると、吉永氏はまとめました。改めて、対話的な学びでは対象（教材）との対話、他者との対話、自己との対話の3つが大切で、主体的な学びを「自律的に学んでいることを心地よく感じている」と表現しており、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくりに古くから取り組んできた「奈良の学習法」を意義深く感じる瞬間でした。

教員免許状更新講習に向けて

令和元年度 教員免許状更新講習 ― 県と大学との協働3年目 ―

教員免許更新制は教育職員免許法第9条の3に基づき、平成21年4月に始まり、全国の大学等で教員免許状更新講習として開設されました。今年度で11年目を迎えますが、10年に一度巡ってくる講習ですので、ちょうど2サイクル目が始まることになります。

ここ数年来、現代社会は「知識基盤社会」「少子高齢化と人口減少」「A T・情報ネットワークの推進した社会」「貧困化」「グローバル化」「ダイバシティ化した社会」といった課題が顕著になり、現在の子どもの活躍する10～20年後の近未来すら予測することが困難な社会であると言われています。こうした社会を生き抜くには、主体的に、他者と協働しながら多面的・多角的視点を持ち、深く考えながら課題に取り組んでいく資質・能力を培うことが大切です。そこで、まずはその子どもたちの教育にあたる教員こそが、その資質・能力の向上を図ることが肝要と考えます。

そこで、福井大学（以下、本学という）では、受講者の先生方に満足いただけるよう、毎年度いずれの分野・領域でも創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきています。特に福井大学連合教職大学院（以下、本学教職大学院という）では、開設当初から「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ ― 実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る―」をキーコンセプトに実施してきました。

本講習プログラムは、そうした教員の資質・能力を向上し、学び続ける教員を生涯支えることを目的に設計されました。特色としては、これまでの本学教職大学院のスタイルを引き継ぎ、次のようになっています。

- ①本学教職大学院の教師教育のノウハウを生かして、「実践・省察」を重視した講習にしていること
- ②少人数による話し合いを基本とし、そのグループ構成は講習、年齢、地域、教科等の枠組みを解いたものになっていること
- ③必修領域「教育実践と教育改革Ⅰ」6時間に、選択必修領域である「教育実践と教育改革Ⅱ」の6時間、選択領域である「教育実践と教育改革Ⅲ」6時間を加えて、連続3日間の計18時間で一括りとする講習を提供していること

具体的にみると、1日目は受講者自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まります。実践の経験を交流し課題意識を共有するため、グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行います。その後、国の教育施策や世界の教育の動向、子どもの変化と発達について、最新の知見を学び、午後からはグループ内で 今後の実践に向けての展望を考えながら、優れた実践事例資料を読み深めていきます。2日目は、年代別に3コース（「授業づくり」「気がかりな子どもへの支援」「学校マネジメント」）に分かれ、国の動向や学校を巡る近年の変化や気がかりな子どもへの支援を学びつつ、テーマと関連する優れた実践事例を1つ取り上げて考察し、各自レポートにまとめます。その後、コース・年代・校種を交えた新たなメンバーで構成されるクロスセッション（報告会）を行います。3日目は教師としての自らの歩みを振り返り、今後の展望を拓く目的で、2日目のレポートに自らの教育実践を加筆したものを完成させ、クロスセッションで報告しながら省察を深めていくという流れです。

こうした講習を続ける中で本学教職大学院では、多くの先生方にこの学びを10年サイクルで経験していただくことが、学び続ける教員をサポートすることにつながるという確固たる理念となっていました。その理念を福井県教育委員会（以下、県教委という）に御理解いただき、一昨年度からは共催で講習を実施しています。さらに、働き方改革として教員の負担を減らすということもあって、福井県教育総合研究所（以下、県教育総合研究所という）が行う中堅教諭等資質向上研修8日間のうち3日間を本講習と兼ねることにもなっています。また、県教育総合研究所が実施している新任教頭研修の一部にあたるファシリテータの実践型研修を、教員免許状更新講習の中で行っています。

改めて、県教委との共催として本講習が悉皆の研修となったことは、本学教職大学院の講習内容を県内の公立学校のすべての教員の方々に受けていただけるようになり、本学としては誠に喜ばしいことと感じております。また、受講者の皆様にとっては、必修講習、選択必修講習、選択講習の3日間、計18時間分の受講料を福井県に全額補助していただいていることで負担軽減になりました。さらに、県教育総合研究所で一度に申し込みができることで、手続きが簡便になったことも大きいと考えます。

本学教職大学院では、事後評価アンケート等から受講者のニーズや要望をしっかりと受け止めながら、実際の教育現場で大いに活かせるよう充実した講習とするため、県教委と協議しながら内容の吟味と丁寧な運営を心がけています。本年度も、これまでの教師としての実践の中で大切にしてきたこと、試行錯誤しながら取り組んできたこと、そして、その中で考え悩んできたことなどを語り合い聴き取りながら、さらには実践記録の展開を読み深め自身の実践を綴る中で、新しい時代の教育への展開に視界をひらいていく講習です。互いに共有した実践や経験が一人一人の先生の財産となれば幸いです。

本年度の講習の詳細については、以下のとおりです。

対象の職種 福井県採用の教員で、現在国公立の学校に勤務する者

(教諭、実習助手、寄宿舎指導員、栄養教諭、学校栄養職員、養護教諭)

講習名

教育実践と教育改革Ⅰ(教育の最新事情①)・・・必修講習部分(1日間)

教育実践と教育改革Ⅱ(教育の最新事情②)・・・選択必修講習部分(1日間)

教育実践と教育改革Ⅲ(教育の最新事情③)・・・選択講習部分(1日間)

日程・会場

①令和元年 7月23日(火) 7月24日(水) 7月25日(木) 3日間とも福井県教育総合研究所

②令和元年 8月 6日(火) 8月 7日(水) 8月 8日(木) 3日間とも武生商工会議所

③令和元年 8月20日(火) 8月21日(水) 8月22日(木) 3日間とも福井県嶺南教育事務所

④令和元年12月24日(火) 12月25日(水) 12月26日(木) 3日間とも福井県教育総合研究所

※詳細は、福井県教育総合研究所ホームページからお願いします。(教職大学院 血原 正純)

Schedule

夏の集中講座

サイクル1 a日程 7/22-24 b日程 7/25-27

サイクル2 a日程 7/29-31 b日程 8/1-3

サイクル3 a日程 8/8-10 b日程 8/19-21

10/12 Sat 10月合同カンファレンス(A日程) 10/19 Sat 10月合同カンファレンス(B日程)

11/9 Sat 11月合同カンファレンス(A日程) 11/16 Sat 11月合同カンファレンス(B日程)

福井大学教育学部附属特別支援学校公開研究会
(兼：全国学校体育研究大会 特別支援学校部会 プレ大会)
御案内（第一次）

研究テーマ

「分かる・できるを実感し、楽しさや喜びにつながる
『運動』の授業づくり」

（2年計画1年次）

- *期日 令和元年11月15日（金）9：40～16：30
- *会場 福井大学教育学部 附属特別支援学校
- *内容 9：40～10：40 授業公開（中学部）
10：50～11：50 授業公開（小学部）
12：00～13：10 昼食
(12：40～13：10 ポスター発表)
13：20～13：50 全体会Ⅰ（研究概要説明等）
14：00～15：30 学部研究会
15：40～16：10 講演（内田匡輔氏）
16：20～16：30 全体会Ⅱ（全体助言等）
- *講演 (仮)「新学習指導要領と特別支援教育」

内田 匡輔 氏 （東海大学 体育学部体育学科 教授）

今年度は、2年計画の始まりの年になります。昨年度までは、「子どもの主体的・協働的（対話的）な学び」（どのように学ぶか）を大切にした授業づくりを行い、授業づくりをする上で大切にする視点や子どもの主体性について研究を行ってきました。

今回の研究では、「運動」の授業において、「どのように学ぶか」という視点だけでなく、「何ができるようになるか」という視点も大切にし、子どもの姿からの評価を基に PDCA を丁寧に行い、生涯楽しみながら運動に親しむ子どもを育てるための研究を行っていきます。

たくさんの先生方との協議から、多くのことを学び合える研究会にしたいと思っています。皆様の御参加をお待ちしております。

【問い合わせ】

福井大学教育学部附属特別支援学校

〒910-0065 福井県福井市ハツ島町1字3番地

TEL 0776-22-6781 FAX 0776-22-6776

E-mail f-tokusi@f-edu.u-fukui.ac.jp

担当 久保 文

*詳しい日程や内容につきましては、9月中旬に二次案内にてご案内申し上げます。



福井大学教育学部附属幼稚園

リレーシンポジウム開催

平成から新時代へー幼児教育の無償化と保育の質向上。子どもたちの姿から学び続け
未来を拓く園になるためには？ 日本をリードする有識者の方々と 新しい時代の園の在り方を
共に考えましょう。2年間で全6回シリーズのリレーシンポジウム。ご参加お待ちしております。

令和元年 6月5日(水)・10月16日(水)・11月9日(土)

同日 公開研究会・幼児教育研究集会を開催します

今年度ご参加いただく先生方

無藤 隆 先生 (白梅学園大学)	秋田 喜代美 先生 (東京大学)
堀越 紀香先生 (国立教育政策研究所幼児教育研究センター)	
松寄 洋子先生 (千葉大学)	石井 恭子先生 (玉川大学)
佐川 早季子先生 (奈良教育大学)	
松木 健一 先生 (福井大学)	岸野 麻衣 先生 (福井大学)

詳細は 福井大学教育学部附属幼稚園のホームページをご覧ください

【編集後記】 先日の実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions が、前夜の落雷の影響により、会場となる教育系 1 号館が停電・断水という事態に見舞われ、急遽工学部の建物での開催となりました。みなさんにはご不便をおかけして、申し訳ございませんでした。このようなかつて経験したことのない状況のなかでも、大きな混乱なく開催できたのは、ひとえに一人ひとりが状況のなかで柔軟に対応してくださったおかげです。スタッフ一同、心よりお礼申し上げます。(H)

教職大学院 Newsletter No.124

2019.7.6 内報版発行
2019.7.15 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp